

平成25年度

青少年赤十字国際交流事業
“フィリピン派遣”

—実施報告書—



平成25年8月11日(日)～18日(日)



日本赤十字社福島県支部
青少年赤十字福島県指導者協議会



目 次

1. あいさつ（日本赤十字社福島県支部事務局長）	2
2. フィリピン派遣によせて（派遣団長）	3
3. 派遣団員名簿	5
4. 交流日程	6
5. 訪問地（図表）	7
6. 訪問日誌	9
7. フィリピンを訪問して（派遣団員所感）	15
8. 自由研究（高校生団員）	51
9. 事前・事後研修会の開催	66
10. 報告会の開催	67
11. 実施要項	69
12. 持参の交流物品 あとがき	71

※1 学校について

フィリピンの小学校は1～6学年、高校が1～4学年となっている。フィリピンの高校は日本の中学1～3年、高校1年までの在学である。

※2 ソルトパヤタスは正式には、特定非営利活動法人ソルト・パヤタスであるが、文中ではソルト・パヤタスと表記している。

あ い さ つ

日本赤十字社福島県支部

事務局長 野 崎 洋 一

日本赤十字社福島県支部では、東日本大震災に対する復興支援事業の一つとして、青少年赤十字国際交流事業「フィリピン派遣」を平成25年8月11日から8月18日の日程で実施いたしました。

この派遣事業は元々、青少年赤十字の実践目標の一つである「国際理解・親善」を具体的に実践するため、広く世界の国々に目を向け海外の青少年赤十字メンバーとの交流や援助実施地域での奉仕体験を通じて国際性豊かな青少年を育成することを目的に、平成18年度から実施していたものです。

しかし、平成23年3月11日の東日本大震災とそれに引き続く原発災害のため、平成23年度、24年度については事業の休止を余儀なくされました。

平成25年度については、本県の復興の担い手となる若者を、自然災害の多いフィリピン共和国に再び派遣し、大震災に際して寄せられた支援に対する感謝の気持ちと福島の今の姿を直接伝えるとともに、フィリピン赤十字社の活動状況を学びフィリピンの若者との交流を深める事業を実施したいと考えました。

幸い、世界の赤十字社から寄せられた救援金を財源に行っている東日本大震災復興支援事業の一つとして認められ、県内の高校生10名と指導教員3名、支部職員2名の計15名をフィリピン共和国に派遣することができました。

派遣メンバーはまずマニラ首都圏のフィリピン赤十字社本社を訪問して、自然災害の多いフィリピンで活発に活動しているフィリピン赤十字社の状況を学びました。また、完成してから一度も稼動しないまま観光施設になっているフィリピン唯一の原発や人々が巨大なごみ山とともに生活している貧困地区などを視察するとともに、高校や小学校を訪問して温かい歓迎を受け有意義な交流を行うことができました。

7泊8日という短い期間ではありましたが、派遣メンバーの高校生たちは日本とは気候、風土、生活環境の全く違うフィリピンで様々な体験をし、また多くの人達と交流を深めることにより、何物にも変えがたい貴重な経験をすることができたものと思います。

平成25年11月8日、フィリピン中部を襲った台風30号は同地域に甚大な被害をもたらしました。フィリピン派遣メンバーの高校生たちはすぐ行動を開始し、青少年赤十字の仲間に呼びかけて募金活動を行いました。派遣メンバーの高校生たちは、フィリピン派遣の経験を生かして、常に広い視野を持ちながら人の苦しみを思いやることのできる心の温かい人間として成長していくってくれるものと確信しています。

終わりに、今回の派遣事業実施に当たりご支援ご協力を頂いた関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。

平成25年度 第5回福島県青少年赤十字フィリピン派遣に寄せて

派遣団長

福島県立須賀川高等学校

教諭 吾妻 久

今回のフィリピン派遣実施にあたって、計らずも団長の任を預かり、まず第一に日本赤十字社福島県支部をはじめとする関係者の方々のお力添えにより、派遣メンバーが大過なくその日程を終えることができたことに胸をなでおろしている。派遣中のフィリピン赤十字や各学校との交流のためにできる限りの準備はしたつもりではあるものの、様々な点で不安をかかえての出発であった。しかし、派遣生徒が良くも悪くもおおらかな性格の持ち主ばかりで、各自が自分の役割を自覚し、これまでに培った「ボランタリーサービス（VS）」と「先見」を派遣準備から派遣期間中に至るまで実践してくれた。特に今回の派遣にはJRC加盟校以外からの生徒の参加があったが、お互いに同じ目的意識を持って準備活動に取り組み、次第に心を一つにすることことができたようになったのも、日頃のJRC活動を通して円滑な人間関係を構築するスキルを身に着けたことによる成果である。また同行した各高校の先生方も、フィリピンへの渡航経験をはじめとして豊かな国際交流事業のご経験から生徒を厳しくも温かくご指導していただいたことが、今回の成功につながった。

これまでに行われたフィリピン派遣と2年ぶりに再開した今回のそれとの異なる点は、東日本大震災以降初めての派遣であることだ。震災後に支援をいただいた国の一であるフィリピンに直接感謝の意を伝えることは今回の派遣の大きな目的の一つであった。その目的をどの程度達成できたのか、正直なところ自信はない。むしろ、今思うのは、フィリピンの方たちがもっと大きな心で私たちを迎えてくれたということだ。

実際、私たちがフィリピンに到着した当日はちょうど台風がフィリピン北部を通過中で、フィリピン赤十字はその対応に追われており、その台風の影響で休校中なのにも関わらず交流会を実施していただいた学校もあった。派遣中、訪問地に予定より2時間近く遅れて到着したにも関わらず、快くプログラムを実施していただいた。日本であれば「申し訳ございませんが…」と言われても仕方がないと思われる場面が何度かあったが、それでも、臨機応変に我々を迎えてくださるフィリピンの方々の姿に、心が打たれる思いがした。こちら側の目的や意図をはるかに上回る心遣いで、日本から来た高校生をはじめとする私たちが有意義な時間が過ごせるようにと奔走してくださった。

訪問当時も現在も福島県はいまだなお原発事故の余波で、風評被害や将来への不安に苛まれている人々が数多く存在し、日本だけでなく世界の人々にもその現状を知らせたいというのがもう一つの目的でもあった。しかし、今回の訪問を通して、そのフィリピンも常に自然災害で苦しむ人々や地域が存在し、稼働寸前の原発まであることを知った。様々な理由から貧富の差が増大し、その両方の姿を目にしてきた。失業問題や国内紛争など、フィリピンの人たちにも私たちと同様の将来に対する不安や心配はある事実を目の当たりにしてきた。そのような状況の中で、フィリピン赤十字のスタッフやボランティアが前向きに諸問題に取り組む姿や、国民が勇気を持って原発の稼働を食い止め、私たちのような海外からの訪問客を温かく受け入れる姿に接し、お互いに支援したりされたりする立場にいつでもなりうる

ことを忘れてはならないと思った。フィリピン赤十字の活動方針 “Always First. Always Ready. Always There.” に、すぐそこにある未来に立ち向かう姿勢が見えた。

派遣終了にあたり、派遣中に出会った人々とこれからもお互いの活動について情報交換したり、この経験を具体的な赤十字活動や国際貢献に結び付けることは、派遣された私たち全員の責務であると考えている。特に参加した生徒たちが、JRCをはじめ県内でできるだけ多くの人たちと志を同じくする個人あるいは団体と、意見交換や新たな活動をはじめることが、今回の派遣を支援して下さった方たちへの恩返しにもなるのではなかろうか。その意味で、参加メンバーにとって、この経験は赤十字にとどまらず、様々な形で国際協力の場面に役立つ財産になることは間違いないと確信している。

最後に、今回のフィリピン派遣にあたって、その再開を強く後押しして下さった福島県青少年赤十字指導者協議会の先生方、成田空港まで見送りに来て下さった鵜沼先生をはじめ、同行していただいた金子先生と石田先生、および日本赤十字社福島県支部関係者のみなさま、派遣メンバーの生徒および教員を快く送り出していただいた関係各校の諸先生方、フィリピン赤十字のみなさま、訪問先の各学校の先生方、NGOソルトパヤタスの関係者のみなさま、そして私たちの派遣期間中毎日朝早くから夜遅くまでコーディネイトしてくれたガイドのリンさんと運転手さん、ジャーナリストの藍原さん、その他フィリピンでお世話になった全ての方へ、心から感謝申し上げます。

2013年9月某日 記す

平成25年度青少年赤十字国際交流事業「フィリピン派遣」参加者



日 下 輔

福島県立
福島高等学校
2年



鈴 木 裕 太

学校法人松韻学園
福島高等学校
2年



仲 川 優 葵

福島県立
本宮高等学校
2年



橋 本 裕 太

福島県立
郡山北工業高等学校
3年



安 藤 摩 耶

福島県立
須賀川高等学校
2年



中村 アイリン

福島県立
猪苗代高等学校
3年



田 中 さくら

福島県立
いわき総合高等学校
1年



新 田 万里子

福島県立
喜多方高等学校
2年



丹 野 洋 人

福島県立
湯本高等学校
2年



菅 野 有里子

福島県立
相馬東高等学校
2年



小 林 みゆき

福島県立
福島工業高等学校
青少年赤十字顧問



吾 妻 久

福島県立
須賀川高等学校
青少年赤十字顧問



青 木 由 紀 子

福島県たいら養護学校
教諭



金 子 久仁子

日本赤十字社福島県支部
青少年赤十字指導講師



石 田 政 幸

日本赤十字社福島県支部
ボランティア係長

交 流 日 程

■ 8月11日(日)

- 9:00 日本赤十字社福島県支部出発
(貸切バス)
10:00 郡山出発
11:00 いわき出発
15:00 成田空港着
18:25 成田発 DL173便
22:05 マニラ国際空港着
バス移動
0:20 デュシタニマニラホテル着

■ 8月12日(月)

- 6:00 朝食
9:00 フィリピン本社到着
本社内の施設見学、東日本大震災支援のお礼、募金寄託等の実施。
11:40 フィリピン本社の方々と歓迎昼食会
13:00 ラス・ピニャス副支部見学
現地RCYにお土産を渡す。
14:00 バンブーオルガンチャーチ見学
15:00 ラスピニャス公立高校との交流
18:00 地元選出国会議員に招かれマニラホテルにて夕食
20:30 ホテル到着

■ 8月13日(火)

- 6:00 朝食
7:00 ホテル出発
11:00 バタアン支部訪問
11:20 支部や現地RCYの方々と歓迎昼食会
13:00 移動
15:00 バタアン公立高校との交流
17:00 支部や現地RCYの方々と交流夕食会
18:30 ホテル到着

■ 8月14日(水)

- 7:30 朝食
8:00 ホテル出発
10:30 バタアン原発見学

チェルノブイリ、フクシマの原発事故の影響で1度も稼働しておらず見学施設になっている。
14:30 昼食後移動
移動の道はバタアン死の行軍の史跡(ルート)でもありました。
16:00 サン・ギレモ・パリッシュ教会
ピナツボ山噴火の火山灰で半分埋まっている教会。
19:00 夕食
21:00 ホテル到着

と交流しながら)
14:30 パヤタス地区訪問
ソルトパヤタス現地体験プログラム実施
エンパワーメント事業を身近に感じた。
17:00 移動 マニラへの移動がラッシュに会い大幅に遅れた。
20:30 夕食(歌舞店員さんのいるレストラン)
フィリピン本社の方々によるお別れ会。
22:30 ホテル到着

■ 8月15日(木)

- 7:00 朝食
7:45 ホテル出発
9:00 クラーク飛行場にて航空機事故救援訓練見学。大規模な訓練を見学する。
12:00 昼食
現地のファーストフード店ジョリビーで食べる
14:30 West Clark Field、他旧日本軍基地跡見学。旧日本軍跡は3か所訪れた。
神風特攻隊の飛行場跡で平和を祈った
20:00 ホテル到着
移動中にラッシュに会いホテル到着に時間がかかった。
20:30 夕食
予定を変更し、日本食の夕食だった。

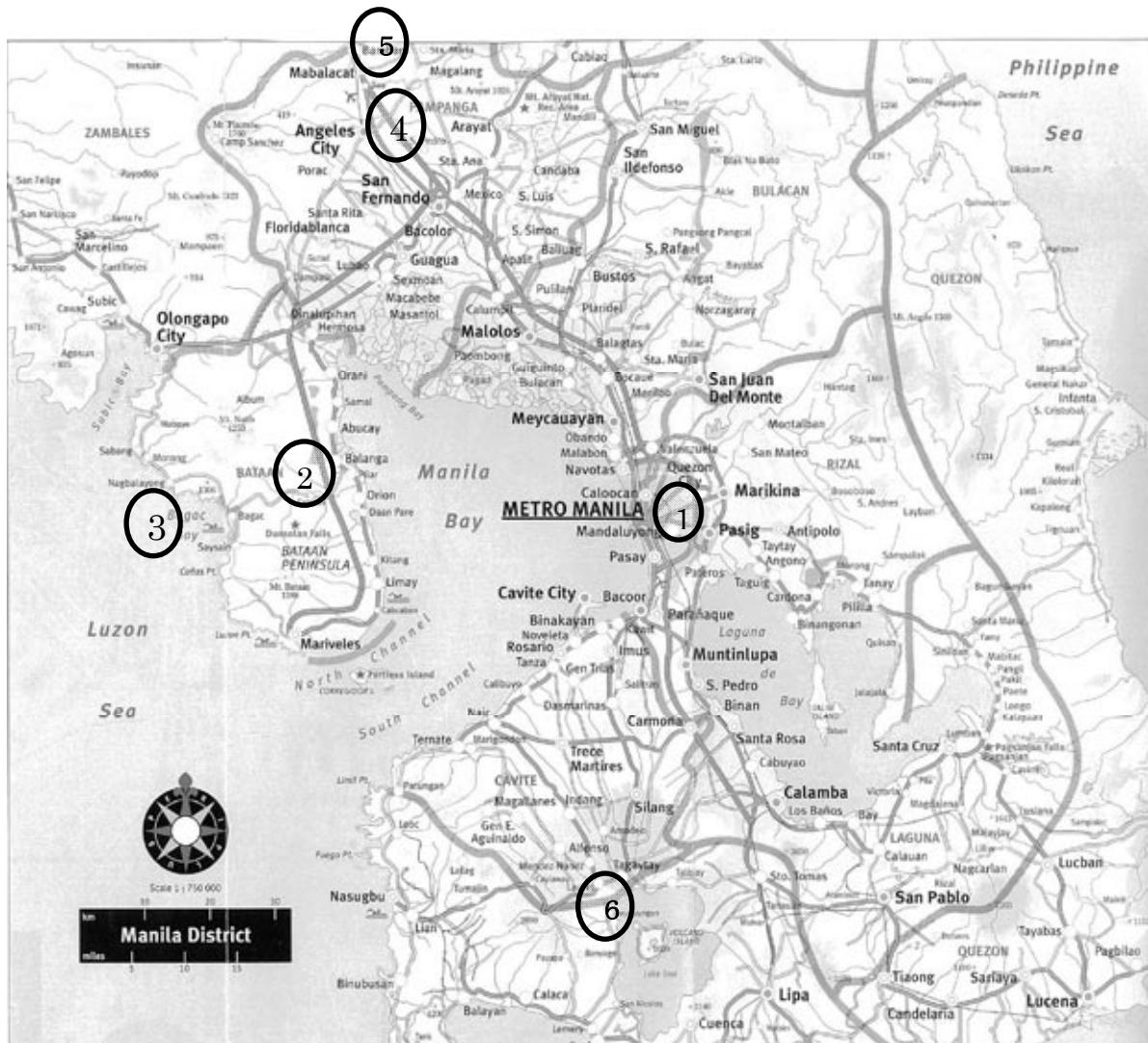
■ 8月17日(土)

- 7:00 朝食
8:00 ホテル出発
9:00 アメリカ人記念墓地マニラの一等地にきれいに整備されていた。
12:30 タガイタイ市タール湖到着
展望台までジプニー(現地のバス)に乗る。
13:30 昼食
17:00 モール・オブ・エイジア世界で3番目に大きいショッピングモールとのこと。
20:30 夕食
22:45 ホテル到着
フィリピン本社のシャロンさんと通訳のリンさんとのプチお別れ会をした。

■ 8月18日(日)

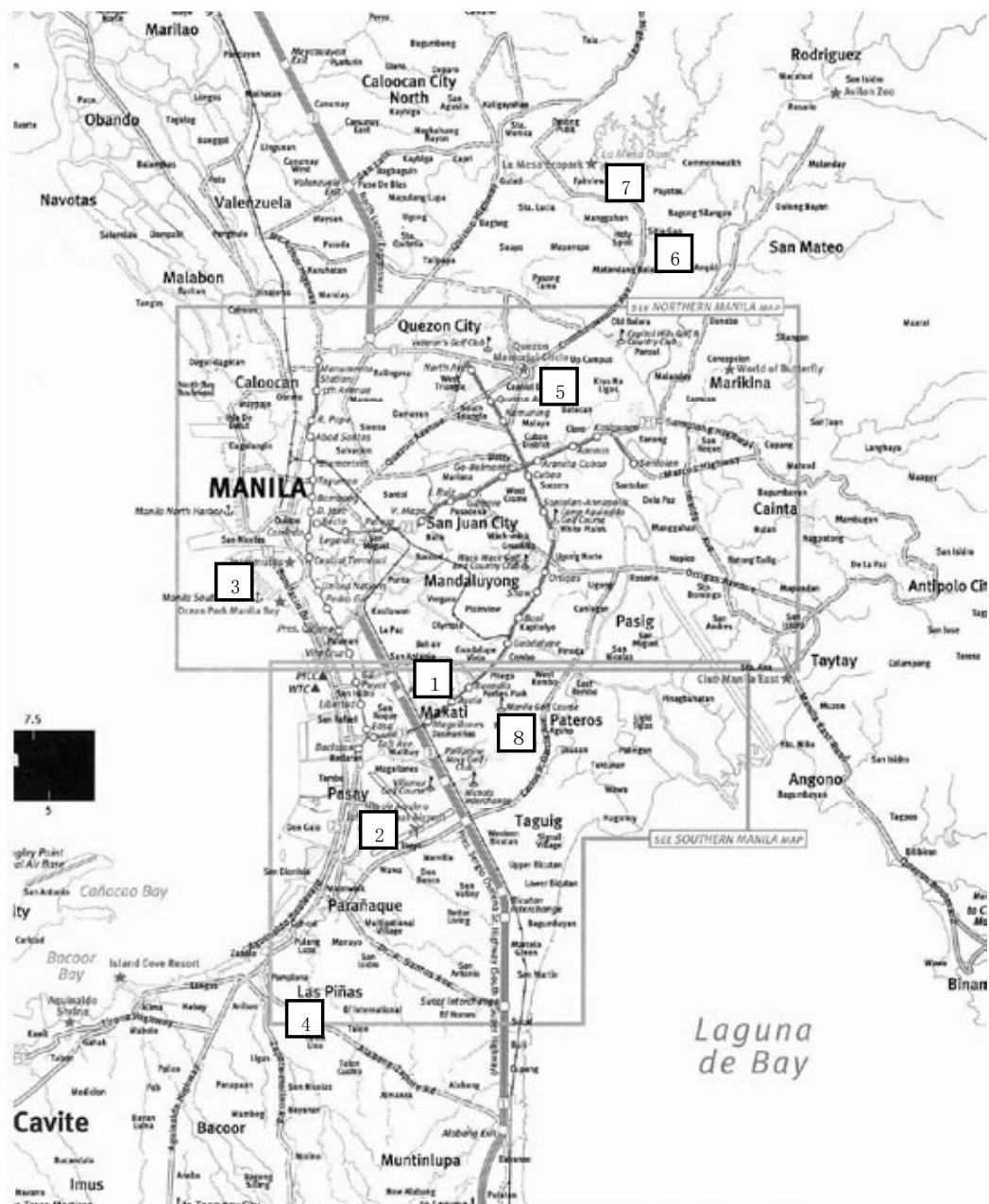
- 5:00 ホテル発
5:30 マニラ国際空港到着
7:40 マニラ国際空港発 DL172便
13:10 成田空港着
14:30 成田空港発(貸切バス)
17:00 いわき中央IC着
18:30 郡山駅前着
19:30 日本赤十字社福島県支部着

2013年フィリピン派遣 訪問箇所（広域）



位置No.	訪問地	訪問日	活動内容
1	マニラ首都圏	8月12日(月)	午前：フィリピン赤十字本社 午後：ラス・ピニヤス副支部、バンブーオルガン教会、 ラス・ピニヤスハイスクール訪問交流
2	マニラ首都圏→バターン州 バランガ	8月13日(火)	午前 マニラからバス移動、バターン支部（市内レストラン） 午後：バターンハイスクール訪問交流
3	バターン州モロン バターン州バランガ→パン パンガ州	8月14日(水)	午前 バターン原子力発電所見学 午後 移動しながら「バターン死の行軍」史跡見学 ピナツボ火山噴火泥流被災地見学
4 5	パンパンガ州アンヘレス市 マバラカット→マニラ首都 圏へ	8月15日(木)	午前 パンパンガ支部共催 航空機事故救助訓練参観 午後 博物館見学、神風特攻隊施設跡・碑等見学、 マニラへ移動
1	マニラ首都圏パヤタス地区	8月16日(金)	午前：パヤタス支部、小学校訪問交流 午後：ソルトパヤタス訪問研修
5 1	マニラ首都圏、カビテ州	8月17日(土)	午前：米軍墓地、タガイタイ訪問 午後：モール・オブ・エイジア見学、買い物

2013年フィリピン派遣 訪問箇所（メトロマニラ）



位置No.	訪問地（地名）	訪問日	活動内容
1	Dusit Thani Manila	8月11、12、15、16、17日	宿泊ホテル
2	ニノイ・アキノ国際空港	8月11日到着、18日出発	
3	フィリピン赤十字本社	8月12日(月) 午前	表敬訪問、報告
4	ラス・ピニャス市	8月12日(月) 午後	赤十字支部、学校訪問
5	ケソン市支部	8月16日(金) 午前	赤十字支部
6	メレンションMカステロ小学校	8月16日(金) 午前～昼	小学校訪問
7	Salt Payatas (ソルトパヤタス) 基金	8月16日(金) 午後	散策、家庭訪問、事業視察
8	アメリカ記念墓地	8月17日(土) 午前	施設見学

訪問日誌

【1日目】 8月11日(日) 天気：日本→晴れ フィリピン→雨 記録者：田中さくら

●日 程



- 9:00 福島県支部出発（バス）
- 14:00 成田空港着
- 18:25 成田空港出発 DL173便
- 22:05 マニラ国際空港着 バス移動
- 0:20 デュシタニマニラホテル着

●所 感

15人全員が無事に日本を旅立つことができ、本当によかったです。私は飛行機に乗るのも外国に行くのも初めてだったので不安なことが多かったのが、メンバーが優しくサポートしてくれたので徐々に不安もなくなり、楽しく日本を出発することができた。飛行機内は冷房が効いていて、上着を預け荷物に入れてしまっていた私にとって少し肌寒く感じた。機内食は日本で食べているものと味は全く変わりらなかつた。無事にマニラ空港に着き、空港の外に出ると雨が降っているのと気温が高いせいで、もやつとしていた。バスから見える景色は大きな看板が立っていたり、電飾がキラキラしていたりとても都会的で、自分が想像していたフィリピンと違っていたのでびっくりした。デュシタニマニラホテルはとても綺麗で過ごしやすかったです。

【2日目】 8月12日(月) 天気：曇り／雨 記録者：仲川 優葵

●日 程

- 6:00 朝食
- 9:00 フィリピン赤十字本社
- 11:40 歓迎昼食会
- 13:00 ラス・ピニヤス副支部
- 14:00 バンブーオルガンチャーチ
- 15:00 Las Pinas National High Schoolとの交流会
- 18:00 夕食（地元選出国会議員に招待されマニラホテルにて）
- 20:30 ホテル到着

●所 感

まず、フィリピン赤十字本社の訪問をさせていただいた。フィリピンはとても台風の被害が大きい。だから、赤十字本社の情報管理室から台風情報を得る。また気象情報だけではなくフィリピンの支部からの情報も最終的には、ここに集まる。また、「6つのセクション」をもとに活動していると教えていただいた。

その1つのセクションである献血ルームを見学した。献血ルームはとても広く、血液を検査したり、採取する場所があつたりと日本と同じ設備が多いと感じた。また、献血を沢山すれば壁に名前

訪問日誌

を刻まれる。その名前が多く、貢献的な人が日本よりもいるように思えた。また、日本の中中央血液センターが世界で1番クオリティが高いと誉めていただき、誇らしく思う。

昼食後、ラス・ピニャス副支部へ向かった。まず、日本から持ってきたお土産の品を皆で渡すと、とても喜んでいて嬉しかった。

その後バンブーオルガンチャーチを案内していただき。雨が降っていたが、ラス・ピニャス副支部の方が私たち全員の傘を用意してくださったため、皆濡れずに済んだ。そして、英語が分からぬ私に簡単な英語や分かり易いようにジェスチャーを使って話していただき。簡潔ではあったが、会話をすることが出来た。フィリピンの方々の優しさに触れることが出来たと同時にそのことととても感謝した。

バンブーオルガンチャーチとはおもにレンガと竹でできている教会のこと。このオルガンは、パイプの殆んどが竹で作られている。このオルガンは200年もの歳月が経っているにも関わらずとても美しく、厳かな音色を教会全体に響かせたのでとても驚いた。これからもずっと変わらない音色

を後世にも伝わるようにしてほしい。

交流事業の学校訪問のラス・ピニャス公立高校では、民族の踊りや音楽、楽器で私たちを歓迎して下さった。とても素晴らしい踊りと音楽で、歓迎していただき驚いたとともに感動した。私たちはプレゼンテーションと「よさこい」で交流を図ったが、皆でよさこいを合わせたのが数回だったので上手く出来なかった部分もあった。だが、全員で想いを込めて踊ることができ、あちらの方々も楽しんで見ていたと感じた。また、大技を皆で決めた時には歓声をあげて喜んでいて、とても嬉しくなった。だが、まだまだ課題があった。だから、皆で次こそはもっと上手く踊れるようにとよさこいの練習をした。



ラス・ピニャスの学校の様子

【3日目】 8月13日(火) 天気：くもり 記録者：鈴木 悠太

●日 程

- 6:00 朝食
- 7:00 ホテル出発
- 11:00 バタアン支部訪問
- 11:20 歓迎昼食会
- 13:00 移動
- 15:00 バタアン公立高校との交流会
- 17:00 交流夕食会
- 18:30 ホテル到着

●所 感

昼食を通してのバタアン支部の方々との交流では震災のVTRを流して震災による被害の影響を知ってもらうことができた。また、食後には一緒に写真を撮影するなどをして交流を深めることができた。

その後には、学校を訪問して高校生たちによる盛大な歓迎を受けた。高校生たちのとても綺麗な踊りや、歌を披露してもらった。私たちも浴衣の

訪問日誌

気付けパフォーマンスをした後に、SMAPの世界に一つだけの花とマイケルジャクソンのheal the worldなどを歌った。着付けパフォーマンスでは、浴衣を数名の女の子に着せてあげると、とても喜んでもらえた。歌のheal the worldでは、一緒に歌ってくれる高校生たちも多く、一緒に楽しめた。私たちの発表の中によさこいも披露する予定でしたが、時間の関係上この場で披露できなかつたことが少し残念だった。

夕食も昼食と同じくバタアン支部の人たちと食べた。食事中にバタアン支部の方々と会話を交え楽しい時間を過ごした。会話で伝わらないことが

何度かありましたが、その度に身振り手振りを入れると伝わることも多く、伝わった時にはとても嬉しくなった。



【4日目】 8月14日(水) 天気：晴れ 記録者：橋本 裕太

●日 程

7:30 朝食
8:00 ホテル出発
10:30 バタアン原発見学
14:30 昼食
16:00 サン・ギレルモ・パリッシュ教会見学
19:00 夕食
21:00 ホテル到着

●所 感

4日目で時差にも慣れ、全員朝の集合時間にも遅れずに集合し出発した。約1~2時間かけバタアン原子力発電所に到着した。バタアン原発は山の中にあり、料金を払って入場し、町や農村から離れた海岸沿いにあった。まず初めにバタアン原発の仕組みや原発がどれほど有益なのかを職員の方から説明を受けた。また、州が反対していて地元の住民は賛成していることや福島原発との違いなどを知ることができた。次にバタアン原発が稼

働停止していることや各設備について詳しい説明を受けた。原発内部の設備は整備が行われてはいたが、屋根のメンテナンスが十分に行われず、最上階部分は雨漏りがひどかった。派遣メンバーそれぞれが原発について深く考え、意見を持つことができた有意義な時間になった。昼食を済ませ、ピナツボ火山の噴火の際に、建物の上半分だけが残った教会（サン・ギレルモ・パリッシュ チャーチ）を訪問した。移動の途中に火山灰で埋まった家や火山灰の上に立つ家などが見られた。ガイドさんによると火山灰下にはまだ、亡くなった人が



訪問日誌

いるという。教会は学校の近くにあり、学生たちが教会のベンチに多くいた。修道士らしき人影は見られず、出入りは自由のような感じだった。ピナツボ火山の脅威や教会の歴史に関する資料が展

示されており、教会内には今でも噴火の爪跡が目で見てはっきりと確認できるほどだった。自然の持つ力が計り知れないことをメンバー全員が感じていたように思う。

【5日目】 8月15日(木) 天気：曇り時々晴れ 記録者：安藤 摩耶

●日 程

- 7:00 朝食
- 7:45 ホテル出発
- 9:00 クラーク飛行場にて救援訓練見学
- 12:00 昼食
- 14:30 West Clark Field (他3か所、旧日本軍基地跡) 見学
- 20:00 ホテル到着
- 20:30 夕食



●所 感

クラーク飛行場

私たちは、この日ここで行われた航空機事故の救援訓練を見学した。着いた瞬間、怪我をしている人がたくさんいて驚いた。しかし、それは、血のりなどを使って、本番さながらにメイクをしているボランティアの姿だった。様々な小道具などを使いながら、怪我の程度の違いを表現していた。滑走路に移動して、訓練の現場を見ると、かなり本格的であった。まず、飛行機の模型が燃やされ、多くの消防車と救急車が到着し、消防士、看護師、兵士まで参加していた。怪我の程度ごとに色分けしたカードで救護者を分けるトリアージを初めて目の前で見ることもできた。参加者全員が迅速に対応していて、緊迫感のある訓練だった。私も、緊急時に冷静で機敏に対応ができるようになりたいと思った。

神風特攻隊基地跡

この日の午後は、神風特攻隊が出発した基地の跡地に訪問した。神風特攻隊とは、第二次世界大戦中、帰りの燃料を持たずに飛び立ち、最終的には敵の戦艦に体当たりするという、いわば戦争の犠牲となったかつての日本空軍の兵士たちである。跡地には防空壕もあって、実際に戦争が過去にここであったという現実を感じた。墓標の前には、私たちが訪れる以前に供えられたと思われる



訪問日誌

日本語のメッセージカードのついた花束があった。今もこの地を訪れる神風特攻隊の遺族はどんな思いで花束を捧げたのだろうか。多くの人々が

血と涙を流し、命を落とした戦争は、二度と起こしてはならないとあらためて心に刻んだ。

【6日目】 8月16日(金) 天気: 晴れ 記録者: 日下 輔

●日 程

6:00 朝食
7:00 ホテル出発
8:00 ケソン市支部
11:30 メレンションMカステロ小学校での交流会
13:30 昼食
14:30 ケソン市パヤタス地区訪問
20:30 夕食(フィリピン赤十字の方々とお別れ会)
22:30 ホテル到着

などを披露してもらった後、こちらからはよさこいや着付けを披露した。

最後はフィリピンの子どもたちと一緒にになって Heal The Worldを歌い、大いに盛り上がった。

パヤタス地区を訪れると、独特なおいがした。貧困地域と呼ばれるパヤタス地区の家庭を訪問し、日々の暮らしについて話を聞いた。

夕食のお別れ会では、レストランの店員さんが、Top Of The Worldや、長渕剛の「とんぼ」を歌ってくれた。フィリピンのおもてなしの文化がよく表れたお別れ会だったと思う。



●所 感

ケソン市支部は福島県支部にひけをとらないくらい設備が充実していた。

小学校を訪問すると、バスで校門を通った時からまた鼓笛の演奏が聞こえ、驚いた。

また、交流会では、フィリピンの伝統的な踊り

【7日目】 8月17日(土) 天気: 晴れ 記録者: 新田万里子

●日 程

7:00 朝食
8:00 ホテル出発
9:00 アメリカ人記念墓地
12:30 タール湖(タガイタイ市)
13:30 昼食

17:00 モール・オブ・エイジア
20:30 夕食
22:45 ホテル到着(お世話になったフィリピン赤十字本社のシャロンさん、ガイドのリンさんとプチお別れ会)

訪問日誌

●所感

アメリカ人記念墓地は、通常は許可なしには入场できない場所である。墓石はすべて大理石ででき正在て、大多数は十字架の形でキリスト教信者の墓であり、その中にいくつか星型の墓石があり、それはユダヤ教の信者たちの墓だ。円形のモニュメントが墓地の正面に位置し、戦時中の海図がモニュメントの内側に大きく彫られていた。アメリカ軍がいかに日本軍を駆逐してフィリピンを解放したかが詳細にわかる図で、驚いたのと同時に日本人としては複雑な気分だった。

タール湖はフィリピン北部の景勝地の一つであるが、残念ながら訪問した当日は雨模様だったので、眺めはあまり良くなかった。しかしそれが逆に神聖な雰囲気を醸し出していたようにも感じた。湖の周りを囲む山の頂上まで行くのにバス(ジプニー)を利用した。街中ではよく見かけるそのバスは、後ろの扉がなくトラックの荷台のような座席で座り心地は決して良いとはいえない。展望台になっている山頂に到着すると、日本の観

光地のように土産物店が軒を連ねていた。蛙の姿をした首飾りは、本物そっくりで皆驚いていた。

世界で3番目に大きいと言われるショッピングモールへ行った。警備員が扉のところどころに立っていて、セキュリティーが厳しいことが窺われた。日本でも見かける、ユニクロやスターバックスなどがあった。約1時間半滞在し、お土産品を購入した。

交通渋滞で遅くにホテルに到着し、シャロンさんとリンさんとのプチお別れ会をした。明日日本に帰るのが嫌だと言っていた人もいた。バラの花で感謝の気持ちを伝えた。



【8日目】 8月18日(日) 天気: フィリピン→雨 日本→晴れ 記録: 丹野 洋仁

●日程

5:00 ホテル出発
5:30 マニラ国際空港着
7:40 マニラ国際空港発 DL172便
13:10 成田空港着
14:30 成田空港発 (貸切バスにて移動)
北茨城IC、湯本IC、いわき中央IC
を経る。
18:30 郡山駅前着
19:30 日赤 福島県支部到着

●所感

朝早くの移動であったが、通訳のリンさんが空港まで来てくれた。メンバーの中には帰りたくない、もう少しフィリピンにいたいと言っていた人もいた。ホテルで朝食のサンドイッチと果物、飲み物を用意してくれた。青果物の検査では特に問題がなかったが、生のオレンジを持っていたメンバーは没収となってしまった。その区別はどこから来るのかなど考えてしまった。フィリピン派遣の7泊8日は行く前は長いかななどと思ったが今思うと短かった。何事もなく日本に帰ってくることができた。

フィリピン派遣事業に参加して

福島県立福島高等学校 2年 日 下 輔

今年の夏、私は青少年赤十字国際交流事業「フィリピン派遣」に参加した。8日間のフィリピンでの経験は私にとってとても刺激的で充実したものだった。震災後初のフィリピン派遣事業であったため、福島県青少年赤十字の代表として、「福島の今」を正しく伝えるという責任があった。私たちはその責任と自覚を胸に福島を出発した。

派遣3日目バタアン州へバスで移動中、一人の少女がフェンス越しにバスへ近寄って来た。何を言っているのかは分からなかったが、何かを訴えていることはすぐに分かった。彼女は食べ物をねだっていた。私は何か渡してあげようと思ったが、その場で食べ物を渡すことで彼女の現状を変えることができるのか、ただ今をやりすごすだけに過ぎないのではないかと自分に問いかけた。結論として、自分が今すべきことはこれではないと考え、何も渡さなかった。見て見ぬふりをするようでつらかったが、自分の選択が最善の選択だと信じた。彼女と出会って感じたもどかしさや悔しさを忘れずに、いつか貧困問題解決の手助けをしたいと思った。

また、派遣6日目はスモーキーマウンテンで生活する人々が住むパヤタス地区を訪れた。パヤタ



ス地区へ入り、バスのドアを開けたとたんバスの中へ独特の臭いがたちこめ、ここは本当に貧困地域なんだなと改めて感じた。現地のスタッフからパヤタス地区の説明を受けた後、私たちは4つの班に別れ、それぞれ家庭を訪問した。トタン板やベニヤ板で屋根が作られ、床はそのままの地面だった。頭をぶつけそうなほど低い天井には電球が一個ぶら下がっていた。私が訪れた家庭のお母さんに、一日の収入はどれくらいなのか、また物を拾う以外に収入は無いのかを尋ねた。一日の収入は、ゴミ山からペットボトルや新聞紙を拾い、100~150ペソ（日本円で200~300円くらい）だと言っていた。また、布で織物などを作り、それらを売ったお金も収入の一部になると言っていた。しかし、安定した収入が無いため食べ物が無い日もあることを知り、私はそれまで何気なく言っていた「いただきます」「ごちそうさまでした」の重みを感じた。震災後生活が一変し、当たり前の生活は明日にはもう無いかもしれないと身をもって感じたはずが、たった2年でそれを忘れ、一日三食が当たり前だと感じていた自分に気づき、愕然とした。家庭訪問を終えるときに「同情はしないで欲しい。私たちの発展を見守っててね。」と



言われ、先進国が発展途上国を支援する動きが世界にもっと広まれば、貧困問題を解決することができるかもしれない、と思った。2日目、3日目、6日目と学校を訪れた。私たちの乗ったバスが校門に入るとすぐに鼓笛の演奏が始まったり、200～300人くらいの生徒たちに大歓声で出迎えられたりと、驚きの連続だった。また、小学生の子どもたちはフィリピンの伝統的な踊りやフィリピンの誕生劇を披露してくれた。そのお返しとして私たちは福島の今を伝えるプレゼンやよさこい、歌などを披露した。回数を重ねていくごとに満足のいく発表ができる様になり、みんなに喜んでもらえたので良かった。

この8日間の滞在で感じたフィリピンのおもてなしの文化、人のあたたかさには本当に感動し

た。またいつかフィリピンへ行き、人々の幸せのために貢献したいと思った。最後に、日本赤十字社福島県支部の方々、8日間共に過ごした先生方やメンバーの皆さん、出会えた全ての方々に感謝している。ありがとうございました。



「フィリピンで過ごした8日間」

学校法人松韻学園福島高等学校 2年 鈴木 悠太

私は、英語が苦手でフィリピンに行ってコミュニケーションが取れるのか不安であった。実際にやってみても会話はあまりできなかつたが、身振り手振りを加えて話することで相手に自分の伝えたいことを伝えることができ、とてもうれしくなつた。また、相手の人も私が英語を苦手なのを察してくれてゆっくり説明してくれたり、ジェスチャーを加えてくれたりとても優しい人が多く、安心した8日間を過ごすことができた。

フィリピンに着いてから初めて見る街の光景に驚いた。綺麗な家が並ぶ中、本当に人が住んでいるのかと疑問に抱くような家も数多く並んでいて、町の風景を一目見ただけで貧富の差が激しいことが分かった。

2日目にフィリピンの赤十字本部を訪問した。

そこではフィリピンで行っている赤十字活動や施設の説明などを聞き、日本とフィリピンの活動の違いを学ぶことができた、日本よりもフィリピン赤十字青年ボランティアの方が積極的に参加しているように感じ、日本でも赤十字青年ボランティアの人数を増やしていきたいと思った。

赤十字の方々をはじめ多くの方々と交流した。その中でも一番印象に残ったのは学校での交流だ。どこの訪問先を訪ねても手厚く歓迎してくれてとてもうれしくなつた。学校には計3回訪問したが、どこの学校でも子供たちの歌やダンスの歓迎があり、とても綺麗で素晴らしい感激した。それに対し、自分たちが出し物として披露したよさこいは練習の時間もあまりなかったせいか自分たちの中では満足のいく結果にならなかつた。それ

でもフィリピンの生徒たちは喜んでくれたが、学校の方々の温かい歓迎に対して自分たちの出し物がいまひとつだったことに申し訳なさと悔しさを感じた。その後、自分たちの出し物も完璧にさせるために時間を見つけては練習に取り組んだ。その結果もあって2回目、3回目の披露では上手に踊ることができ、1回目の披露よりも格段に良くなり盛り上げることができた。また、その後のプレゼントの交換の際にも持ち合わせていた折鶴やトピックアルバムを渡すとともに喜んで受け取ってくれた。

6日目にパヤタスに住んでいる人たちの生活を



見学してきた。そこにいる人々はみんな笑顔だったことが印象深い。「将来どのような就職につきたいのか」や「どのぐらいの収入で生活をしているのか」など、どんな質問にも親切に答えてくれて心が温かい人たちが多かった。ゴミ拾いが主な収入源の少ない収入の中、毎日の生活が困難になっている状態と聞き、日本にはないような現状が実際に起きていることを目の当たりにした。自分たちにとって毎日3食食べたり、毎日学校に通うという当たり前の生活がどれだけありがたいことなのかを実感できた。

今回フィリピン派遣に参加して多くのことを学ぶことができた。ゴミを拾って暮らす人々や教育を受けずにいる子供たち、日本では目にすることのない光景に毎日驚かされていた。自分たちにできることは何かを考え、今後のJRC活動に励んでいきたいと思う。このような非常に有意義な機会を与えてくださった赤十字の方々、そして通訳のリンさんを始めとするフィリピンの皆さん、本当にありがとうございました。



フィリピン研修に参加して

福島県立本宮高校 2年 仲 川 優 葵

「フィリピン」そう聞いてイメージしたのは「発展途上国」「台風被害が多い国」位だった。だが、空港に着き外を見ると街並みはとても綺麗で街頭や店の灯りもあり、イメージと全く違っていて私にはとても眩しく感じられた。しかし、そんな考えは打ち消された。首都マニラから少し離れるとホームレスの方が外で生活していた。また、裸足でアスファルトを走る子どもや「食べ物下さい。お金下さい。」と来る人々、パヤタス・ダンプサイト周辺に住み捨てられた資源を拾い、それを

売って生活する人々（スカベンジャーと呼ばれている）、私の想像を超えた現実がそこにはあり、憂いを感じたうえに、何もしてあげられない自分が恥ずかしかった。それからは少し街の灯りがくすんで見えててしまった。だが、その人たちの為にフィリピン赤十字は医療を無料で提供するなどの対策をしていると聞いて少し安心した。だが、まだ充分ではないことを見てきた。その人たちに出来ることをこれから見つけていくのが課題だと思う。

○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

バタアン原発では私はフィリピンに原発があること自体知らなかったのでとても興味があった。バタアン原発は一度も稼働していないので中に入ることが出来た。中は、巨大な機械が多く、厳肅な雰囲気だった。だが、前日まで雨が降っていたからか、最上階には、水溜りが足元に沢山あり、天井からは雨漏りが酷かった。稼働する場合は雨漏りや機械を直すと言っていたが私はとても不安に思った。



バタアン原発



私の8日間

福島県立郡山北工業高等学校 機械科 3年 橋 本 裕 太

「フィリピンという国についてほとんど何も知らなかった」というのが私がフィリピンに行って一番感じたことだ。私の考えるフィリピンは、とても貧しい発展途上国で、出発前は、初めての海外渡航なのにそこで自分が8日間も生活するなんてできるのだろうか、という不安でいっぱいだった。ところが、実際にフィリピンに着いてみると、マニラ市内には大きなビルが建ち並び、日本以上に発展しているように見えるところもあり、そのあまりの大きさに正直驚いた。

しかし、それと同時に貧富の差の大きさも感じずにはいられなかった。首都マニラや市街地を離れると、そこには都市部とは全く異なる生活をす

原発の外ではヤギが飼育され、足元には綺麗な緑色の草が生え、目の前には美しい青色の海が広がっていた。稼働すれば、フィリピンのエネルギー不足の解消になるが、一度事故を起こせば私の見た自然がもう見られなくなると思うと、とても悲しくなる。私はこれからもバタアン原発が稼働しないことを願う。

私は今回の海外旅行が初めてで、各地区の学校から知らない人、10人が集まるということでとても緊張していた。だが、皆それぞれ面白くて優しくてとても頼りになる人たちだった。だから旅行に関しては、不安なのは初めのうちだけで、フィリピンでの時間、毎日がきらきらと輝いていた。時間が過ぎる度に私は「また今日が終わるなあ。」と寂しく思っていた。だがその反面、時間を重ねるごとに皆と仲良くなれて本当に嬉しかった。私はこのメンバーに「ありがとう。」と伝えたい。



る人々を多く目にした。移動中の高速道路のサービスエリアの柵越しに手を伸ばし「お金をください」と言っていた少女の目や声を今でも忘れることができない。あの時、どうすることが正しい判断だったかはわからない。私は見ているだけの自分に無力感を感じたし、とても悲しい気持ちになった。

ソルト・パヤタス訪問では、ゴミ投棄場のごみ山崩落事故の話を伺い、パヤタス地区の家庭を訪問させていただいた。私が訪問した家庭は親子5人家族だった。天井は低く、中腰にならないと歩けない低さで、家というよりは小屋と言った方が適切で、とても狭い空間に家族が暮らしているこ



とがわかった。そこで生活や家族についての話を聞き、胸がいっぱいになり、自然と涙がこぼれた。娘さんが奨学制度に選ばれながら結核が全身に転移し亡くなってしまったことや、1日を家族5人がコーヒー1杯で過ごすことがあるなど、日本では考えられないことがそこでは起きていた。しかし、その状況にも負けず、自分の家族に幸せになってもらいたいという親の愛と強い心に私は感動した。

フィリピンの赤十字（PRC）では日本と異なる取り組みがなされている部分もあり、とても興味深かった。PRCの本部では日本と同様、緊急援助・福祉・青少年活動・献血と分野ごとに活動が分割されていた。特に大きく掲げていた活動は1リーダー43メンバーという活動で一人のリーダーが43人のボランティアメンバーを募り、指揮することで効率よく活動するというものだ。青少年活動では、私たちと同世代のメンバーの活動状況の説明などもあり、活動の中には救急法講習などの共通点も見られた。PRCナンバー1を自負するケソン市支部では、確かに支部としては設備や活動内容が充実しているように思われた。フィリピン赤十字は台風の対応に強く、日本赤十字社は地震の対応に強いことなど教えていただき、両者の特長を知ることができた。

パンパンガ州のクラーク飛行場では、PRCと地

元の警察や軍隊も協力した、大規模な飛行機災害発生時の訓練を見ることができた。実際の事故を想定したケガの特殊メイクをしたボランティアが多数おり、トリアージの訓練や実物の救急車や消防車が何台も出動するなどスケールの大きさに驚かされた。AEDも日本との違いがあり、緑色のプラスチックのケースで、ケースの外にスイッチが付いていて、ケースを開ける前に電源を入れるなどフィリピンの人々が使いやすいように工夫されていて興味深かった。

交流プログラムではフィリピンの人たちの温かさや派遣メンバーの良さを感じる時間となった。各学校を訪問した際に、いつも最初にフィリピンの生徒がすばらしい民族舞踊を披露してくれ、フィリピン赤十字青年ボランティアのメンバーと食事を共にすることもできた。私たちは練習が不十分で当初よさこいソーラン節が上手く披露できず、悔しい思いをした。少しでも交流先の人たちに喜んでもらえるよう、派遣メンバーの高校生全員で一日をふり返り、次に備えてお互いにアイデアを出し合い、助け合いながら、次第にそれぞれの個性も出て、いい発表ができるようになってきたようだ。ここだけの話だが、訪問校でフィリピンの生徒と交流する時間は少しだけスターになれた気分がした。



○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

私にとって今回の派遣が生まれて初めての海外渡航だったし、決して忘れられないこの8日間の体験は、これからの私の人生を左右するといつても過言ではない出来事だった。人生初の海外で目にしたのは、すさまじい発展を遂げる一方で貧困に苦しむ人々や、戦争の傷跡、同じ「赤十字」でも国による装備や活動の違い、もしかしたら日本以上のおもてなしの心で迎えてくれる人々だった。このような体験ができる高校生はこの日本に一体何人いるのだろうか。この経験をできるだけ

たくさんの仲間に伝え、これからの活動に活かすことが私の責務だと思っている。



「フィリピンで出会った私の夢とこれから」

福島県立須賀川高等学校 2年 安藤 摩耶



始まる前は長いように思えたが、終わってしまえば短かった8日間。この赤十字フィリピン派遣の8日間は、私の一生の財産になった。

1日目は成田空港からフィリピンへの移動日で、初めての海外だが到着したのはその日の夜なので、海外に来たという実感が湧かなかった。2日目になって、バスでの移動中に日本とは違う景色を見て、やっと自分がフィリピンにいるのだという確信が持てた。

フィリピン赤十字の活動見学や、学校での交流会など様々な体験をしたが、その中で特に印象深かったのは、6日目のソルト・パヤタス訪問だ。

ソルト・パヤタスは仕事がなく、生活を安心して送れない地域住民に奨学金支援、学習支援、ライフケル教育などの支援をしているNGOだ。訪問する地域は決して裕福と言えない。バスでの移動中、嫌な匂いがしても、鼻をつまんだりしてはいけないと通訳の方から事前に注意をされた。一体どんなひどい匂いがするのかと内心不安に思った。確かに、現地に着くと少し匂いがして、ハエがたくさん飛んでいたり、犬の糞があちこちに落ちていたりして、決して環境が良いと言えなかった。

現地でまず気づいたのは、大人も子供も裸足で歩いている姿で、正直驚いた。裸足で歩いて、何かを踏んで怪我をしたり、病気の原因にならないかなど、心配になった。

そのパヤタス地区で、ある家庭を訪問させもらった。そのお母さんが「狭いところで、ごめんなさい。」言つたが、私たちが頼んで入れてもらっているのだから「ごめんなさい。」は私達のセリフだなと思った。家の中は、狭く、とても6

○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

人で生活しているとは思えなかった。家の中に入り、そのお母さんから家庭事情を伺った。家族構成は4人の子どもと夫の6人で、夫は無職なためお母さんがクロスステッチの仕事や、洗濯の仕事で、家計を支えている状況だ。ソルトパヤタスの支援で刺繡入りの製品を作ってはいるが、収入は1日で日本円で200円～300円で、1日の食事は「コーヒー1杯のときもあるの。」と笑って話すお母さんを見て、思わず涙が出てしまった。長女が病気になった時、すぐに病院に連れて行けず、亡くなってしまったそうだ。その経験から、子どもが病気にかかったらすぐに病院に連れて行くことにしたという話も聞いた。日本では当たり前でも、フィリピンではそうではないと知り、貧困地域の現状を目の当たりにした。これから夢を聞くと、子供たちを大学まで行かせることで、今より少しでも良い生活をさせてあげたいと教えてくれた。だから子どもには彼女を作らない、悪い友達を作らない、と約束させているとまた笑って答えてくれた。「どうして辛いのに笑顔なのですか。」と聞くと、「笑顔じゃないと、子供達を不安にさせるから。」と答えてくれた。日本でも「母は強し」という言葉があるが、フィリピンでもその通りで、子供が本当に大切だからがんばれるのだと、貧困と闘っているフィリピンの人たちの強さを思い知らされた。最後に「同情はしないでください。それが1番辛いです。」と言われたので、同情はせず、貧困地域についてもっと知識を得て、将来、私達が出来ることを考えたいと思った。

そのほかに印象深かったのが、学校訪問だ。私達は、小学校から高校まで計3校を訪問してきた。どこの学校に行っても、びっくりするぐらいすごい歓声や音楽で私たちを迎えてくれた。交流会では、地元の様々な伝統舞踊を披露してくれたり、フィリピンの歌だけでなく日本語の歌を歌つ



てくれたりした。私達のために、いったいいつかからどれだけ練習してくれたのだろうと考えると、驚きと感謝の気持ちでいっぱいになった。

私はこれまでフィリピンに関して報道などでしか情報を得ることができず、貧困が現実なのか信じられなかった。今回のフィリピン派遣に参加することができ、貧困が現実だと気づくことができた。しかし、生活が苦しい中でも、笑顔で明るく、がんばるフィリピンの人々の姿を見て、私もがんばって将来の夢を叶えないと、と思いを新たにすることことができた。今回の体験を、これからJRCの活動、そして将来の夢である看護師に生かすことが私の役目だと思っている。そして、今度は将来の夢を叶え、支援する側として、フィリピンを訪れる日のために努力し続けたいと考えている。



フィリピン派遣に参加して

福島県立猪苗代高等学校 3年 中村 アイリン

今回の派遣で、私は派遣生徒の副リーダーを務めました。3年生という自覚を持ってリーダーのサポートに徹し、派遣期間中には交流会でよさこいを披露した後の反省を聞いて、次の練習の企画などもしました。その中で一番難しかったのは、サポート役に徹するためのリーダーとの距離感だった。心の中では「3年生だけど、リーダーにがんばってほしい」という気持ちから思い切った行動に表せないでいたのを、傍目には「恥ずかしくて譲り合っていた」と受け止められてしまうことがあったと思う。トレセンなどでリーダーのあり方については学んでいたものの、いざ実践となると難しい面もあることを学んだ。

派遣中は、フィリピン赤十字の本部や支部の訪問、小学校や中学生、同年代の高校生との交流、バタアン原発の見学をした。さらにごみ処分場の近くで生活し、子どもを学校へ通わせることができない家庭を支援する日本のNGO「ソルトパヤタス基金」の活動拠点を訪問し、パヤタス地区の家庭訪問などを経験した。

フィリピン赤十字本部や支部では、施設を見学して私は初めて献血やその保存方法と使われる器具を見ることができた。学校交流ではものすごい歓迎を受け、最初に交流したラス・ピニヤス公立高校の伝統舞踊が優雅で、踊っている生徒たちも綺麗でとても感動しながら見ていた。私たちも着付けやよさこいを披露したが、最初はあまり完成度も高くなかったので、大きな反省材料となつた。移動や帰りのバスや空き時間を利用して何度も何度も試行錯誤を繰り返した。そのおかげで最後に交流したメレンシオMカステロ小学校で披露したよさこいは大成功に終わることができた。私

は前列で踊ったので、他のメンバーとの息が合っているかは確認出来なかったが、あとから先生から「今までで一番良かった」と言っていただき、達成感を感じることができた。



バタアン原発では、最初に原子力発電所について話を聞いたが、英語での説明と通訳だったので、正直、全てを理解することはできなかった。しかし、原発が他の発電方法に対してCO₂の排出量が少ないと聞いて、訪問前は原発を否定していたが、新しいもっと地球環境に影響のない発電方法が見つかるまでは利用するのもやむを得ない面があることを知らされた気持ちになった。

派遣6日に訪れたソルトパヤタス基金は、貧しさから学校に通えない子どもたちのために奨学金などの支援をしている団体だ。他にも、家庭をもつ母親に刺繡を教えて、その技術を使った仕事を提供するという職業支援もしており、丁寧に刺繡されたタオルやハンカチなどは、Atelier Likha(アトリエ リカ)と検索すればオンラインでの購入も可能で、私たちにできる支援のひとつを見つけることができた。家庭訪問では2人の子どもをもつシングルマザーの方のお宅に行った。話を聞き、パヤタス地区内を散策し、市場や地区の唯一

○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

の小学校も目にし、貧しいながらもたくましく生活する人たちのバイタリティーを肌で感じた。

フィリピンは、日本とは違い学校も家もカラフルな建物がよくあって、とても興味がわいた。学校の校舎はまるでレゴで作られたかのようにも見えたりして、すごく新鮮な感じがした。

8日間メンバーとともに活動をして、学ぶことがたくさんあった。女子では唯一の3年生なのに、逆にそのために積極的に話せなかつたことや、暑さで体調を崩し、ガイドさんの話もうわの空だったこともあった。帰国の前日は、熱を出してしまい、メンバーや先生方、ガイドさんや本部からのボランティアの方に心配とご迷惑をかけてしまった。特にその日ずっと私を看病して下さった青木先生と同行したジャーナリストの藍原さんには心から感謝している。最終日も体調があまりすぐれず、荷物を持ってくれたメンバーもいて最後まで励まされた。

とても長いようで短かった1週間だった。訪問

や交流だけでなく、移動が長かったバスの中で、ゲームをしたりいろいろ話したり楽しい時間を過ごすことができた。今回の派遣のメンバーは、選抜されただけあって誰もがとても個性的で面白く、その一方それぞれ自分の夢や目標を持って最善を尽くす人ばかりで、3年生の私も少し圧倒されていた。8日間の一日一日がとても充実し、英語でコミュニケーションをとる機会が多く苦労もあったが、今回このメンバーで派遣を無事に終えることができたことは、私の大きな財産だ。



フィリピンでの体験

福島県立いわき総合高等学校 1年 田 中 さくら

私は、フィリピンに行く前まで正直8日間は長いなと不安に感じていた。しかし、いざフィリピンで8日間過ごしてみるとあつという間で、とても充実した8日間だったと思う。私はフィリピンでたくさんの事を経験し、学び・感じることができた。

マニラに着いて一番最初に感じたことは、私が思い描いていたフィリピンとは全く違うということだ。行く前にフィリピンについてインターネットや資料で色々調べていたが、調べた中には発展途上国やごみが多い、貧困などといった事が書か

れていたので、私はそういった状態を想像していた。しかし、バスから町並みを見る限り日本と同じように大きな看板があつたり、日本にもある店があつたりと発展途上国というような感じが全くしなかつた。それはマニラだからということを私はのちに知った。マニラから外に出てバタアン州に行く途中で見かけた家々はトタン屋根が今にも外れそうになつたり、ビニールシートの様なものを屋根に被せてタイヤで止めてあつたり、敷地がないがために川の上に家が建ててあつたりと日本では見られない光景ばかりだった。そんな中、

○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

たまたま立ち寄った店の駐車場で一人の女の子に出会った。その女の子は5～7歳くらいで私たちに向かって手を出して何かを繰り返し言っていた。言葉の通じない私は、女の子はお菓子を欲しがっているのかと思った。しかし、通訳のリンさんに何と言っているのか聞いたところ、女の子は「お金をください。」と言っていたそうだ。その時の私は、バスの中からその女の子の様子を見ることしかできなかった。私たちは、お金をあげることを禁止されているので何もすることができず、その場を後にしました。フィリピンに来て初めて貧困問題に触れ、今まで以上に貧困と言う問題について考えさせられた瞬間だった。日本に帰国した今でも、あのとき女の子に何かしてあげることはなかったのかと思い悔やまれることがある。

現地の小学校や高校を訪問した際には、どの学校でも私たちを笑顔で盛大に向かい入れてくれた。彼らの笑顔はとても素直で心からの笑顔のように見えた。彼らは、私たちのためにダンスや伝統的な楽器を使った演奏、歌を披露するなど沢山のもてなしをしてくれた。発表の一つひとつに心がこもっていて見ていてとても嬉しくなった。私たちも感謝の気持ちを込めて、南中ソーランや浴衣の着付け、お茶、歌などを披露させてもらった。

発表する前は、上手くいか不安に思っていたが、いざ発表してみると、私たちが踊っている曲に合わせて掛け声をかけてくれる人や着付けに参加したいと言ってくれる生徒もいて嬉しかった。発表が終わると拍手をしてもらえたので私たちの思いが伝わったのだと思う。また、学校訪問の中で一番嬉しかった事は名前を覚えてもらえたことだ。私の名前を呼んで話しかけて来てくれる生徒もいて、国境を越えて仲良くなれたような気がして嬉しかった。

私たちが日本へ帰る際、8日間共に過ごした通訳のリンさんから「フィリピンに来たことを絶対に忘れないでください。」と言われた。この言葉には、フィリピンでした体験やフィリピンにはまだまだ救われない人々がいることを忘れないで欲しいという願いが込められているのではないかと私は思う。私は、この言葉どおりフィリピンに行つたこと、感じたことを忘れずに、今回体験したことを他のJRCメンバーをはじめとするたくさん的人にできるだけ多くの事を伝えたいと思う。そして、8日間の中でお世話になったフィリピン赤十字の方々、現地の方々、8日間活動を共にして仲を深め合ったフィリピン派遣メンバー、先生方、家族、出会った全ての人に感謝したい。



フィリピン派遣

福島県立喜多方高等学校 1年 新田万里子

今回のフィリピン派遣では、これまでの生活の中ではできない体験と発見があった。赤十字関係ではいくつかの支部を訪問し、フィリピンや日本の赤十字の活動について説明し合ったり、施設内の見学をした。その中でも最終日に訪ねたケソン市支部の活動内容が印象に残っている。自然災害などで避難した人々のために移動用キッチン車で食事を提供したり、貧困地域で無料の医療サービスを行ったりするなどの支援活動に日本との大きな違いを感じた。ケソン市はフィリピンでも都市部にあたり、スラム街もある。その中で特にひどい状態の子どもたちの母親たちに一定の人数で定期的に集ってもらい料理を教えていたという話を聞いた。フィリピンではそんなことも赤十字の仕事なのだと、正直少し驚いた。災害などがあった時は、低価格住宅を作り、住む場所を失くした家庭に提供している。これまでに3万~4万5千戸を建てたそうだ。東日本大震災の際などの仮設住宅のようなものかなと思ったが、日本では必要な家財を赤十字が無償提供していたことを考えると、フィリピン赤十字のほうが災害における役割が大きいような気がした。



学校訪問では、どの学校もフィリピンの伝統的な踊りを踊って、私たち派遣団を温かく迎え入れ

てくれた。踊っているときの笑顔はとても印象的だった。フィリピンの子どもたちに、私たちが作った折り紙や名刺を渡そうとするとものすごい勢いで手を伸ばしてくれたし、訪問を終えるときみんな手を振って見送ってくれて、とても嬉しかった。



バタアン原発の見学では、原発の施設の中へ入っていくのはめったにできない体験だったのと同時に福島での事故を思い出して少し緊張した。原発の建物を間近に見たとき、コンクリートで固められた頑丈そうだが何の装飾もない作りに圧倒される思いがした。建設してから一度も稼働していないと聞いて、最初はもったいないような気もしたが、福島で原発事故が起きたあとのことを想像すると、稼働させないでよかったのではないかと思った。実際、これまで稼動させようとしたこともあったようだが、旧ソ連でのチェルノブイリと日本での事故を教訓に、その計画は中止になつたらしい。数十年の時を隔てた二つの事故は、フィリピンの国民にとってはこの原発を稼動してはいけないという神様のお告げのようなものになつた気がした。

NPOソルト・パヤタス訪問では、巨大なゴミ

投棄場とそこから500メートルしか離れていないパヤタス地区を見学した。ソルト・パヤタスでボランティアをしている日本人や、パヤタスに暮らす人たちから話を聞くことができた。この広大なゴミ投棄場には、分別されないまま次々と運ばれてくるゴミの強烈な悪臭の中、再利用可能な資源ごみを探し拾い歩き、それを廃品回収業者に売って生計をたてている人たちがい。日本でも知られているように、その中には学校へも行けない子どもたちがいることもあると聞いた。ただし、そこに住んでいる人たち全員がゴミを拾って生活をしているのではなく、洗濯や裁縫の仕事などの仕事をして得たわずかな収入で生計を立てている人たちもいて、私の想像とは少し違っていた。それでも、政府の意向で、そこに住んでいる人たちがゴミ投棄場の拡大のために強制的に立ち退きを迫られている状況は本当に気の毒だと思った。

今回のフィリピン派遣を通して私が体験したことは、わたしたちの普段の生活では決してできない、貴重な体験だったと今あらためて実感してい

る。学校やゴミ投棄場や神風特攻隊の飛行場跡地などを訪れて、フィリピンで貧困に苦しむ人たちのために募金をしたり、献血をしたり、平和について深く考えたり、高校生として今出来ることをこれからも続けたいという気持ちになった。そして、もっと世界の様々な国に目を向けて、世界の諸問題についてさらに学び、その解決のために少しでも貢献できるようになりたいと考えている。将来は、フィリピンだけでなく、貧困に苦しむ国で学校を建てるための支援活動をすることが今の私の夢のひとつだ。



フィリピン派遣 報告

福島県立湯本高等学校 2年 英語科 丹 野 洋 仁

この派遣の8日間で、フィリピンの赤十字活動と国内での貧富の差などを学びながら、原子力発電所の見学や現地の学校との交流をした。

2日目、台風の影響で雨の1日だったが、とても多くのことを学ぶことができた1日だった。午前中、赤十字本社を訪問した。そこではフィリピンでの赤十字活動について学んだ。特に私が驚いたのは献血活動についてだ。献血ができる年齢は日本と同じだが、一回に献血する量が日本の成人ができる最大量より50mlも多く、全年齢共通の

量を献血することに驚いた。続いて、福島の現状を伝えると、熱心に聞いてくださったり、さらに質問までしてくれたりと、福島の現状を心配されていることを知り、とても嬉しかった。そして、昼食を食べ、バンブーオルガン教会に行った。そこには竹でできたパイプオルガンがあり、その音色に感動した。その近くにある学校に行き、そこで初めて文化交流をした。その日は台風で休校だったのにわざわざたくさんの生徒たちが私たちのために来てくれた。とてもフィリピンの方々の

○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

温かさを感じた。そして、赤十字の方たちと食事をし、初日を終えた。



3日目はバタアン支部に向かい、その後ユースボランティアの方たちと昼食をとりながら交流をした。そして学校に行き、2回目の文化交流をした。その学校の生徒数の多さに圧倒された。そこでは自己紹介もし、とても充実した交流になった。夕食はユースボランティアの方たちと席を共にした。席を日本人とフィリピン人で交互にすることで、色々なことを話すことができ、日本とフィリピンの違いなどを知ることができた。

4日目はバタアン原子力発電所を訪問した。向かう途中の道路でとても道が荒れていることに気付いた。日本の原発事故があったにも関わらず、37カ国で新たに266カ所もの原発の建設が予定されていることに驚いた。それだけCO₂の排出が少ないなど、利点が多いことが分かった。内部を見学して、壁の厚さ、建屋の大きさなどを見られることから、福島の原発事故の甚大さを改めて実感した。

5日目はまずクラーク飛行場で航空機事故救援訓練を見学することができた。それは1年に一回だけ行う訓練で、そのような貴重な訓練を見学することができてとてもよかったです。その訓練において、怪我人を搬送する際、病状に応じて搬送する順番が決まるのに、そのトリアージにかかわらず

子どもや妊婦を優先し、臨機応変に対応することを聞いたときとても心が温かくなった。将来、看護師を目指す私にとってとても感慨深いものとなった。その後、神風特攻隊が初めて飛びたった跡地を見学した。神風特攻隊が最初に飛び立った飛行場など、日本から離れた国でこのような場所があることに感慨深いものがあった。



6日目は初めに赤十字ケソン市支部を訪問した。そこはフィリピンでも一番と言われている支部で、所属している人数もとても多く、設備も充実していた。フィリピンでは台風が年に約27回もきて、その度にレッドクロスのメンバーが活動することがわかった。その後小学校に1時間以上遅れて行ったのに演奏や踊りなどで歓迎してくれてとても嬉しかった。私たちもそれに応えなければと、全員が全力で踊ったよさこいもうまくいき、一番思い出に残る交流となった。そしてソルトパヤタス基金を訪問した。そこではパヤタス地区のごみ山崩落事故で亡くなった人の慰霊碑やふもとに住んでいる人の家庭訪問をした。私が訪問した家は、電気も水も通っておらず、お母さんと子ども2人で暮らしていた。お母さんはベビーシッターをしていて、そのお給料だけでは子どもを育てながら学校に通わせることはできず、子どもエンパワメント事業の奨学金支援を受けて、子どもを学校に通わせていた。そんなお母さんの夢は子

どもの教育課程を修了させることだと聞いて考えさせられるものがあった。その日の夕食は今までお世話になったレッドクロスの方たちとの夕食会だった。とても楽しくいい1日だった。

7日目は第二次世界大戦で亡くなったアメリカ兵のお墓へ行った後、タガイタイの山地へ行った。そこでは雨と雲の影響でタール湖をきれいに見渡すことはできなかったが、とてもきれいな光景を目にすることができた。昼食をとり、夕方はショッピングをすることができた。

8日目は帰国だけの1日だったが、最後の空港までガイドの方が親切にしてくださってフィリピンの方々のよさをとても実感した。

今回の派遣で本当に多くのことを学び、考え方やフィリピンという国に対するイメージが変わった。今後も様々なことを学び、考え、人のためにも自分自身の将来にも役に立たせたいと思った。



フィリピン派遣の感想文

福島県立相馬東高等学校 2年 菅野 有里子

私には、今回のフィリピン派遣でぜひ見学したいと思っていたものが3つある。

1つ目はパヤタス地区のスラム街にあるごみ山だ。私はその場所を一目見て、フィリピンの貧困を象徴する場所のように感じた。今ではむやみに立ち入ることができないようだが、以前は貧しい子どもたちがごみ山に入って様々な病気をもらってきたということを学校の先生から伺った。日々の生活のために、ごみを漁ることを余儀なくされている人々がいるという現実に、日本人の自分がいかに恵まれているかを感じた。見学後、パヤタス地区の民家を訪問した際、現地の方の温かさを感じた。

2つ目は、フィリピン赤十字社の見学である。施設の中を見学していると、検査等に用いる沢山の医療器具があり、清潔で先進的な設備が整っていることに驚いた。フィリピンでも日本と同じ水

準の医療を受けることができると思った。フィリピン赤十字社の方々は、日本語を交えた歓迎の言葉で私たちを温かく迎えてくださり、食事を取り際も様々な話をしてくださいました。しかし、私は英語が不得意なため、話の内容に理解できなかった部分もあり、すこし残念な気持ちが残っている。

3つ目はバタアン原発の見学である。私の住む福島県にも原子力発電所があるが、内部を見学したこととはなかった。身近な存在である原発だが、今までその仕組みについて深く考える機会もなかった。そのため海外の原子力発電所を見学することは、とても貴重な体験になった。内部はとても広く、30年以上稼働していないが設備もそのまま残っていて、福島第一原子力発電所もこのような場所なのかと思った。反原発の世論や政情不安のために稼働することのなかったバタアン原発であるが、再稼働のためには大変なお金がかかると

ということである。原子力発電には大きなリスクがつきものだということを私たち福島県民は身を持って知った。バタアン原発の再稼働についても、フィリピンの方には慎重に考えてもらいたい。



この1週間を通じて強く感じたのは、フィリピンの人々の温かさである。私たち訪問団を見かけると、皆手を振ってくれ、優しく微笑んで歓迎してくれた。渡航前は食事の心配をしたが、新鮮な

フルーツの美味しさに感動した。私にとって今回のフィリピン研修は初めての海外経験でもあったので、多くの不安を抱えての渡航だった。しかし、研修でできた多くの仲間と友情を築き、現地でも温かい歓迎をしていただいたおかげで、非常に充実した研修となった。この体験で得た知識を、自分の希望する進路の実現に生かしていきたい。



フィリピンの闘いに学び 福島を生きる

福島県立福島工業高等学校 JRC顧問 小林みゆき

〈大きな役割を担うフィリピン赤十字〉

近くで遠い隣国、フィリピン。日本赤十字社福島県支部主催のフィリピン派遣の目的は、「福島県内の事実を海外に伝えるとともに数多くの支援を受けたことへの感謝も伝えながら、現地の青年との交流を図る」ことだった。

未だ収束していないレベル7の原発事故。高校生は福島の現状と学校の様子、震災後のJRCの活動を伝えてくれた。訪問先の機器の状態が決して良いとは言えない中で懸命に説明し、短期間で練習したよさこいを精一杯踊る姿にたくましさを感じた。

青年こそが未来を担う。希望を持って前向きに

生きる青年が、福島の希望だ。その意を強くした旅だった。



フィリピン赤十字本社で 日本からの寄付を手渡す

最も大事な目的の1つはフィリピン赤十字との交流である。12日に訪問したマニラの本社では、約100人のスタッフが働いていた。6つにわかれたセクションをすべて案内してもらった。

(1) モニタリングルーム

フィリピンは、年20以上の台風が来る国だ。全国の気象や災害情報を集約、整理して、全国の支部や政府に情報を提供する。24時間体制で運営されていた。

(2) ナショナルブラッドセンター

日本より多い1人450mlまで献血を行う。日本同様、献血者には小さな謝礼のみで、売血はしていない。人口の1%が献血してくれれば間にあうが、不十分な状態だそうだ。政府と赤十字で半分ずつ集めているという。

(3) プライマリーサービス

女性や子供の介護などを行う

(4) ソーシャルサービス

災害後のストレスケアや、受刑者支援を行っている。例えば、フィリピンは7,000以上の島があるので、受刑者の家族が面会に行く費用を年120ペソ支援している。

(5) セーフティーサービス

救急を担う。AEDがあった。学校での救急の講演などを数多く実施している。バタアン支部では山の遭難者の救援まで行っていた。



献血のしくみを説明する職員の方

(6) ボランタリーサービス

ボランティアを行う。1人が43人を集める、「143」システムを取る。数は力なので、人数は多い方が良い。会員が新たな会員を誘う。周りに働きかけるには、赤十字の活動内容や意義を説明しなければならないから、自分が動くのとは別の大変さがある。勧誘することで力量が高まり、会員を増やせる野心的な戦略だと感心した。どこでも若い会員が多いのは、その戦略が功を奏しているのではないか。

その他、低価格の医療検査も行っていた。日本に比べれば建物もスタッフも小規模なのだろうが、フィリピン赤十字の社会的役割が非常に大きいことが伺えた。

ラスピニヤス副支部、バタアン支部、ケソン支部と、どこも歓迎の横断幕を掲げ、手作りの首飾りをいただいたり、食事をしながらの交流ができた。パンパンガ支部や、ケソン市支部は、日本へ多額の寄付を震災時に送ってくれたという。現在でも世界中から日本に支援が集まるのは赤十字の組織力のおかげだ。

赤十字が必要でない社会が理想だが、そんな世界はまだまだ先のことだろう。私は顧問になったばかりで赤十字の活動については分からぬことが多いが、これから学んで行こうと思う。

〈トリアージの訓練を初体験〉

クラーク飛行場は元々米軍基地であったが、現在はフィリピンに返還された。米比協定の期限が切れる1991年にピナツボ山が噴火したために、フィリピン議会が協定延長を拒否し、米軍は撤退していった。

幸運だったのは15日にクラーク飛行場で赤十字の災害救助訓練を見学できたことだ。3回目という「最大規模の訓練」が始まるのを待っていると、

広大な平地の向こうに美しいアラヤット山が望めた。

折れた模型の機体近くに煙が立ちこめ、訓練が始まった。負傷した乗客は、ボランティアが演じる。内臓が出ている人、腕がない人、頭から出血している人など、みなメイクに工夫を凝らしていた。

墜落現場から助けだされた負傷者は、負傷の程度によって色分けされ、まずは少し離れた同色の旗の所まで担架で運ばれる。そこからさらに救急車に運ばれるのだが、妊婦さんは早く救急車まで運ばれた。

「トリアージ」という言葉は知っていたが、実際の訓練の場面を見るのは初めてだった。

ネットでトリアージを調べると、興味深い歴史がわかった。もともとトリアージはフランス語の「トリアージュ」 = 「選別」から来ている。フランス軍人のドミニク・ジャン・ラレイ（1766年～1742年）がフランス革命の時に、貴族身分優先ではなく、医学的重態度から治療を行うことを主張したことから始まった。

トリアージは軍隊の論理から出発した。

命を選別することにもなる考え方に対しては、ジュネーブ条約違反との声もあるらしい。日本では森鷗外が紹介したが広まらず、アメリカでは朝鮮戦争の時に最初に採用したという。日本ではようやく阪神・淡路大震災の時に広まった。

戦争は別にして、大きな災害が起こった場合、人的、医療的にも限界がある中で、瞬時に優先順位を判断するはやむを得ないのでないかと私は考える。

トリアージは、黒（0群）、赤（I群）、黄（II群）、緑（III群）に分けられる。黒は「死亡」または「救急不可能」、赤は「最優先」、黄は「待機」、緑は「保留」である。軽傷な人ほど痛みや救急を

訴えるので、選別が難しく、後で「なぜあのときすぐに救助してくれなかったのか」と訴えられることもあるらしい。クラーク飛行場の訓練で、黄、緑の人たちは大声で助けを求めていた。

放置すれば死んでしまう重傷者を1人救助するのと、数名の軽傷者を救助するのが同じ人員が必要ならどちらを選択するのか、現実には判断を迫られる問題で、これは大変悩ましい倫理的問題である。

選別される側にも、選別する側にもそれぞれの論理がある。トリアージの技術を精緻化する必要はあるのだろうが、根本的には、トリアージが必要でない社会を作ることが重要だろう。

戦争や災害を根絶するための知恵を結集し、努力すべきだと思うのだ。



黄（II群）のタグが見える

〈日比のジェンダーギャップの背景は？〉

フィリピンRCの事務総長や校長など、訪問する先々で、女性幹部が多い印象を受けた。マニラホテルでのディナーバイキングを私たちに招待してくれた国會議員のビリヤールさんも女性だった。2人に1人は女性ということを考えれば実は当たり前なのだろうが、日本より多いと思った。

帰国して「ジェンダーギャップ指数」を調べた。世界経済フォーラム（WEF）が、経済、教育、健康と生存、政治の4分野での男女格差を指数化



マニラホテルでの夕食バイキングに招待された
ビリヤールさんから時計を送られる団長

したものである。2012年日本は135ヶ国中で101位である。下から数えた方が早い。一方、上位7位がほとんどヨーロッパ諸国の中で、フィリピンは8位。堂々のアジア地域での最上位である。

日本とフィリピンの違いをどう見るべきか。まずは「日本の格差が大きい」といえると思う。日本は男女格差に関しては発展途上国並みの不名誉な順位である。1979年にできた女性差別撤廃条約を批准したのは1985年、なんと72番目だ。どうみても「嫌々」との印象はぬぐえない。

日本が下位層なのは、政治分野での格差が大きいのが要因だという。2011年の女性国會議員の割合は、日本は125位11%の先進国中で最低、フィリピンは52位で22%である。フィリピンにはアキノ大統領（1986年～1992年）とアロヨ大統領（2001年～2010年）の2人の女性大統領がいる。日本で女性の総理大臣が登場するのはいつになるのだろうか。

それでは、「フィリピンの格差が小さい」背景は何だろうか。上位7国は、クオータ制を導入している先進国で、憲法や選挙法で女性が国會議員の一定割合を占めるべきだと規定している国である。だが、フィリピンにクオータ制はない。データの根拠はなく直感でしかないのだが、エリートフィリピン女性の家事労働を担う貧困層の女性が

いるからではないか。ガイドのリンさんによれば、月15,000円くらいでメイド1人を雇えるとのことである。特別な教育や資格が必要ではないメイドは、貧困層でもなれる職業である。エリートシンガポール女性を支えるのはフィリピン人メイドのナニーだと記事を以前に読んだことがあるし、最近マレーシアに行った姉によると、マンションに必ずメイド用の小さな部屋があるという。メイドや介護士として、フィリピン人女性は多くの国に出稼ぎに行っていて、外貨を稼いでいるはずだ。

アキノ大統領は大地主の娘、アロヨ大統領はマカパガル大統領の娘である。メイドがいて当然の家庭だったろう。私たちを招待してくれたビリヤール議員の夫は2010年ベニグノ・アキノに大統領選で敗れた政治家。ネットで調べると、貧民地区出身ながら不動産業で財をなし、スターモールStar Mallを経営している大富豪だという。けた違いの金持ちなのだ。

富裕層の女性にとって、女性であることが全く不利にならない社会だから、彼女らの活躍が順位を上げているのではないか。

一方、日本の働く女性の状況はどうか。2009年のP&Gの調査によれば、日本の共稼ぎの妻の家事時間は4時間15分、夫は30分（無職妻6時間52分、夫39分）である。一方、23年度版白書では、6歳未満の子どもを持つ夫婦の家事時間は、イギリス妻2時間45分、夫1時間。アメリカ妻3時間12分、夫1時間5分。ドイツ妻3時間、夫59分である。家事労働の時間が日本女性は先進国の2倍近くある上、長時間過密労働を強いられ、保育所や学童保育などの環境が不十分で、女性が働きにくい社会だ。少子化の一因はこの辺にあると私は思う。

フィリピンと日本では、ジェンダーギャップの

社会的背景がかなり違うと思うのだ。

持つ者と持たざる者の、目がくらむようなフィリピン社会の格差を実感したことがあった。17日にタガイタイのタール湖に行った時の事。火山爆発によってできた見晴らしの良いタール湖を山から見下ろすと、タール湖を望む小高い丘に一軒家や高級マンション、ゴルフ場が眼下に見えた。gated communityだ。リンさんによれば、中に入るまで3度の警備を通過するらしい。今は下院議員をしているというイメルダが返還を要求しているという。

一体彼らはこの美しい風景を独占したいのだろうか。その価値観こそが「貧しい」と呼びたい衝動に駆られた。



タール湖を望む丘に建つ別荘とマンション
すぐ近くにはゴルフコースが広がっていた

〈Learn the facts, discover the truth.

バタアン原発で〉

美しい海と羊がのんびり草をはむのどかな風景の中にバタアン原発は建っていた。

マルコス政権下の1976年に建設開始、84年に完成した。79年スリーマイル、86年チエルノブイリを乗り越え、2011年福島の原発を契機に稼働中止が決まった。現在は入場料を払えば見学できる。私たちが見学した14日には韓国の男性2人が訪れていたから、福島原発の事故後海外から多くの見学客が来ているのだと思う。



蒸し暑い中説明する職員
建設当時から働いているという

見学前に全体的な解説をしてくれる。石油は40年しかないが、ウランは235年もつ、原子力は二酸化炭素を出さないので地球温暖化に関してクリーンであるなど。その後蒸し暑い中を丁寧に説明してくれた。福島原発とは違う型で、燃料棒が入っていない格納容器を上から眺めることができた。

以前来た時も強く感じたが、中央制御室はまるで古い町工場のようで、原発の中枢部という実感はない。使われることのなかった大統領への直通の電話、映写フィルムのようなフロッピー、タイプライターかと思うような古いパソコンなど、時代が何十年も戻ったような感覚になる。これでもバタアン原発は1971年建設で、福島第一原発より新しいのだ。



手前にあるのが昔のフロッピー
右手にあるのが大統領直通の電話

外に出ると誰が書いたのか、野ざらしの机の上にI love BNPP (Bataan National Power Plant)の落書きを見つけた。職員が書いたかもしれない。政治に翻弄された職員の気持ちに思いを馳せた。

私がバタアン原発を見学に来たのは2度目である。2012年3月に最初に見学し、フィリピン非核連合の事務局長のコラソン・ファブロスさん話を聞いた。その際に驚いたことがある。私が26年前の1987年にフィリピンを訪ねた時期、彼女は和歌山に来て、反原発運動から多くのことを学んだと言ったのだ。アキノ政権下のフィリピンでは、様々な団体が反米軍基地、反原発など、多くの要求を掲げて運動をしていた。日本の住民運動から学んだとは不思議な縁を感じたのだった。ファブロスさんは、今後も稼働させようとする勢力は後を絶たないだろうと警戒していた。「作ったら使う」が経済の論理だ。日本が40年で機械的に廃炉にせず、可能ならできるだけ長く使用したいのと同様だろう。

バタアン原発の借金と利子は212億ペソで2007年によくやくアメリカのウェスチングハウス社に完済したらしい。2013年のフィリピンの国家予算が2兆ペソだから巨額な債務だ。結局のところ、国民がバターン原発の負債を負担した。日本の福島原発事故もそうならざるを得ないだろう。除染だけで、少なくとも7~9兆円かかると見積もられていて、東京電力だけが背負うには大きい。

経済的な負債もさることながら、放射性廃棄物は未来世代への負債である。今度は私たちがファブロスさんたちに学ぶ番だ。脱原発は困難で長い闘いになるだろう。でも、自分たちの世代が引き起こした事故の責任は、自分たちの世代で決着をつけたい。

帰り際、受付でTシャツ販売していることに気

が付いた。背中にはLearn the facts, discover the truth Bataan Nuclear Plantとある。職員のアイディアだという。記念に1枚購入した。

事実はどのような視点で見るかによって大きく変わる。例えば、ウランと石油資源の枯渇年数は、ある計算方法をとった場合の結果に過ぎない。別の計算方法をとれば、違う結果ができるかもしれない。また、原発がクリーンであるかは議論の余地があることだろう。真実は、多くの事実を様々な観点から学んだ後に、自らが「発見」=つかみ取っていくものだろう。

見学の生徒の感想は、「危険だと思っていたが原発は安全だった」と「福島の原発のようにきれいごとを言っている」と、評価が分かれた。同じものを見ながら、正反対の意見が出た。それでいいのだと思う。そこから議論を始めよう。私たちは対立を恐れず、原発を今後どうするのか、社会全体で議論をしていかなければならない。

〈「パヤタス」を捨てた小学校〉

12日にラスピニヤス公立高校、13日バタアン公立高校、16日メレンジョ・M・カステカ小学校と公立学校を訪問した。歓迎の式典の段取りが、現地に着いて関係者と話しをするまで分からず苦労したが、生徒はよく頑張ったと思う。臨機応変によさこいや浴衣の着付けを披露し、パワーポイントでNow of Fukushimaを説明した。

ラスピニヤス公立高校は、私たちを玄関や階段の両脇に直立不動の生徒が待っていて、歓迎してくれた。銃を持った生徒もいて驚いたが、木製と聞いて安心した。披露してくれた踊りは男女の恋愛をテーマにしているのもあって、日本人高校生なら恥ずかしくなってしまうだろうと、文化の違いを感じた。バタアン公立高校では、思いがけず女子生徒の熱狂的歓迎を受けとまどった。



ラスピニヤス公立高校の踊り

公立高校は施設の様子から明らかに教育予算が不十分だと思われた。私立高校を訪問しなかったので詳しくは分からぬが、私立高校は外観が立派で、すぐそれと分かる。バンブーチャーチに隣接する私立高校は、優秀な生徒の顔と進学先を大きな横断幕で宣伝していた。



全校生徒の熱烈歓迎を受けたバターン公立高校

17日にはパヤタス地区のメレンジョ・M・カステカ小学校を訪問する。720人の生徒に130人の教師がいる大規模校で、3交替で授業をしている。幼稚園も併設されていた。ちょうど私たちが到着した時間帯が交替する時間だったので、帰宅する子どもと登校する子どもで混雑していた。

9:30からの歓迎式典の予定だったらしいが、

私たちの到着が2時間も遅れた。でもたくさんの子どもたちが屋根のあるホールで興味津々といったふうで私たちを待っていた。

最初に踊りを披露してくれたのは特別支援クラスの子どもたち。先生が見本の踊りをみせながら、熱心に指導する姿に胸を打たれた。その後は、タガログ語なので残念ながら意味は分からぬが、詩を皆で朗唱しながらパフォーマンスしてくれた。

優雅な踊りとは違う、「ピープルパワー」を感じさせる力強いものだった。「マルコス政権下の戒厳令の時が一番辛かった。友人2人は未だに行方不明」とはガイドのリンさんの言葉である。独裁政権を追放したエドサ革命の歴史を継承しようとする強い意志を感じた。



ピープルパワーのシンボルカラーである黄色い鉢巻をして、詩を朗唱しながら演舞する子どもたち

頭に壺を載せての優雅なダンスもあった。小学2~3年生くらいの少女たちで、簡単そうに踊っていたが、終わってから自分も頭に載せてみたが、落としそうになりあわてて手を添えた。意外に難しいのだ。

蔵書が少ない小さな図書館で、昼食を食べながら交流する。青木先生が、先ほどの特別支援の先生に質問していた。慢性的な過剰定員で、定数すらない日本の特別支援のレベルでさえ、フィリピ

ンからすればまだ良いようだ。青木先生が「(先生の数が少なくて)疲れませんか?」と聞いたら、若い女性の先生は「チャレンジャー」と言ったという。1人でも奮闘する教員の熱意に感銘を受ける。



見学に来たお母さんたちと記念撮影
子どもたちが実際にキュートで感激

昼食後、壁に書いてあるカステカ小学校の説明を読んでいたら、パヤタス小学校から改称したことがわかった。パヤタス=貧困地区のイメージがあるので、差別されないように改称したということを、午後に行ったソルト・パヤタスのパンフから知った。

今年の夏に訪れた水俣で、水俣市民が差別的発言をされた話を聞いた。福島県も他人事ではない。「福島県内にいれば、差別されることはない」と書いた生徒を思いだす。将来結婚する時に、福島出身であることを隠さなければならない状況が出てくるかもしれない。

差別はあってはならないが、差別を糾弾するだけでは解決しない。まず差別の構造を学ぶことが必要だ。なぜ貧困があるのか、なぜ水俣病や原発事故が起きたのか、学ぶことでしか「差別」と認識し、乗り越えることができるのではないか。

社会科の教員として、どのように教訓、教材にできるか、その力量を問われていると思う。

〈ごみ投棄場は拡大し続ける〉

16日午後は、パヤタスに出かける。カステカ小学校からバスで20分程度。バスから降りると少し異臭がする。小さな子どもたちがたくさん路上で遊んでいて、ごみや犬の糞があちこちにあり、下を見ないでは歩けない。

最初にソルト・パヤタスの事務所に行く。日本人女性のスタッフが概要を説明してくれた。ルパン・パンガコ地区の人口は約10万人。パヤタスはその中の人口12,000人程度のバランガイ(区)である。外から来た人が80%を占める。パヤタスにはごみ投棄場dumpsiteがあるからだ。

以下はソルト・パヤタスのパンフからの抜粋である。「パヤタスは1973年からごみの投棄が始まった。1986年政府の再開発のためにマニラの別のスラム住民が再定住する土地として開発された。パヤタスの30%がごみを拾って生活するスカベンジャーだ。入場にはPOG (Payatas Operation Group) が発行するIDとパヤタス居住者であることが必要で、IDさえあれば24時間制限なしで入れる。ただし、15歳以下は保護者の同伴があると入場できるが、ごみ集めはできない。」

パヤタスの意味は「約束の地」。約束された定住先が最初からごみ投棄地とはひどい話だ。ごみ山の大きさを校庭くらいと想像していたが、30haとの広さに驚く。1日520台のトラックがごみ1,200トンを運び込む。

悪名高かったマニラ北のスモーキーマウンテンは外聞を気にする政府によって閉鎖されたが、ごみ山は別の所にすぐできる。パヤタスでは2000年7月にゴミ山が崩壊し二百数十人の犠牲がでた。ジプニーの運転手がストライキを起こした日で、家にいた子どもたちも巻き込まれ被害が拡大した。234人が死亡したが、いまだ70~80人が行方不明だという。高さ30m、幅100m、約2haの地

域をのみこんだのだから大変な被害だ。その後は閉鎖が発表されたが、崩壊したごみ山の隣に投棄を始めたので第二の山ができている。「それ以外に生活の糧がなかったから」とソルトのパンフは解説する。どんなに規制しようと、それ以外に生活の手段がなければ人々はごみ山に集まる。

巨大なごみ山ができるようになった背景には1999年大気浄化法がある。ダイオキシン対策のため、ごみ焼却を禁止する世界初の法律だという。

さらに、ごみから発生するメタンガスを発電に利用するプロジェクトを進めれば、地球温暖化の削減に貢献したとみなされるクレジット方式が採用されているので、日本の大企業がその発電事業を行い、ごみ山からのメタンガスを利用している。

フィリピンと日本の利害が一致しているから、ごみ山はこれからも広がりつづけるのだろう。

貧困を生む構造が変わらなければ、悲劇は再び起きる。そんな暗い思いを抱きながら、慰靈碑の前で花を捧げ追悼した。



慰靈碑に花を捧げて追悼した
後ろがかつてのごみ投棄場

〈支援を自立に向けてのステップに〉

ソルトのスタッフが、パヤタスの中まで案内してくれた。写真撮影は禁止、ごみ山にも入れなかつたが、住宅地のすぐ近くまで広がっている様子をみることができた。今後も広がれば、住民は早晚立ち退かなければならない羽目にある。土地

所有者は政府との契約でごみ山を認めていて、不法占拠の住民の立場は弱い。



左の女性がソルトパヤタスのスタッフ
後ろは台所で、こんろが1つ、裸電球が1つあった

いくつかの班に分かれて、お母さんたちの自宅で話を聞かせてもらう。私たちが訪ねた女性は1968年マニラに来た。独身時代は月40ペソの家政婦をして、当時の平均的な収入だという。73年に造園業の夫と結婚。88年9月に強制立ち退きでパヤタスに来た。家は自分たちのものだが土地は借りていて地代は払っていないという。台所、リビング、トイレ、寝室をあわせても6～8畳程度の広さである。リビングには合板で作った1人用ベッドが立てかけてあった。

3軒がつながっていて、13人が住んでいる。息子が毎日届けてくれる150ペソ（メトロマニラの最低賃金は1日450ペソ）と、今回のようなソルトの案内料で生活している。まさに「日銭」が暮らしを支えている。もし息子の仕送りがなければ食事にも事欠くのだろう。

こう言つては失礼だが、狭く、暗く、蒸し暑い家。勉強する机はないが、壁には優秀な成績の表彰状がいくつも貼ってあり、誇りにしていることがわかる。お母さんの一番の楽しみはソルトから奨学金をもらっている大学生エルザの成長だという。事務所に帰つてから学生代表として挨拶し、踊りを披露してくれたのがエルザだった。

ソルト・パヤタスは1995年にパヤタスを訪問した小川夫妻が、現地住民から要請があった19名の子どもたちの奨学金支援から始めたNPOである。ソルトとは「塩」。目立たないが、生存のために必要不可欠な塩をシンボルにして付けたらしい。

主な事業は3つある。1つ目は子どもエンパワメント事業で、厳しい環境に生きる子どもたちの知識とライフスキルを高めて、問題解決能力を育もうと、教育に力をいれている。例えば、学費がないために学校に行けない子どもたちを支援する、以下のような会員を募集している。48,000円で1人の子どもが1年間通学し、補習やライフスキル教育を受け、6,000円で10人の子どもが学用品セットを受け取ることができるそうだ。

会 員	年 額
ココナツ会員	48,000円
マンゴ会員	24,000円
バナナ会員	12,000円
パイナップル会員	6,000円

2つ目はママエンパワメント事業。お母さんたちを支援するために、刺繡商品の製造と販売を行っている。2000年の崩落したごみ山を閉鎖することで職を失った女性に仕事の機会を提供するために始めた。刺繡の仕事は集中力を要し、1週間の訓練を要する。刺繡の質が良くない人、納期を守れない人もいるそうだが、事業開始から10年以上経過し、軌道に乗り、生産者は20名に増えているという。

タオルやブックカバー、ハンカチなどの手芸品が、事務所の1階で販売されている。有機綿で作ったハンカチもあり、商品価値を高める努力しているそうだ。ごみ拾いは危険かつ不安定だが、技術を生かせる手芸品生産は自尊心を高めるし、

何より生活が安定する。売り上げの30%が本人の収入になり、10%はソルトが貯蓄し、まとめて6ヶ月後に返還するシステムにして、その日暮らしになりがちな母親を励ましている。

ソルトのHPで初めて知ったが、フィリピンでは銀行に預金するのにも最低預金額が設定されていて、下回ると毎月「罰金」が課せられるという。貧困層にはとても出せない金額なので、貯蓄するすべがない。ソルトが10%を預かって返金しているのはそんな事情があるのかもしれない。それにしても、最低預金額があるとは、私には貧困層に預金させない悪法にしか思えない。

今は現地リーダーがLikhaを作り、運営している。Likhaはタガログ語で「作り出す」の意味。創造的な仕事は、希望も創造する。思いのこもった名称に、スタッフの意志を感じる。

3つ目の事業は、私たちのような訪問客を受け入れる現地体験事業（スタディーツアー）である。

パンフにはソルトの「ミッション」として、「貧困に苦しむ人々が、自己の能力の発見、向上を通じて、自信と希望を持ち、生活の向上を果たしていくための支援を行うこと。貧困問題の長期的解決に向け、学び、行動する人の輪を広げていくこと」「私たちにできること、一緒に考えて行きませんか」とある。

学生たちの踊りを楽しみ、バナナの甘いお菓子をごちそうになったあと、フィリピン人現地リーダーがお別れの挨拶をした。「貧しいからと私たちに同情しないでください。私たちは自分の力で力をつけてempowermentしていきます。皆さんもどうか疲れないように。これから長い闘いになりますから。」

深い感動を覚えた。



事務所で刺繡をするお母さんたち
左上にあるのが有機綿のハンカチ

ソルトを創設した小川さんに、「福島の人たちが来ると聞いて、特別な思いで受け止めました」と声を掛けられた。私は率直に感動を伝え、同じ言葉を返した。福島もまた「かわいそう」と同情してほしくない。パヤタスの人たちと同様、私たちも原発事故後と闘い、復興させていかなければならぬと思ったのだ。

パヤタス住民は自信と力をつけて、ソルト・パヤタスから自立する。福島も、日本もまた、そうあるべきだろう。

〈お腹をこわした原因は?〉

旅行中、最も頑丈そうな高校生の「たんたん」が体調を崩した。猛烈な下痢に襲われたらしい。バスの大きな揺れにも辛かったようで、行く先々でトイレに駆け込み苦しんでいた。

原因は分からぬが、考えられる理由は生水にあたったということだ。フィリピンの生水は現地の人にとっては何でもないが、耐性がない日本人には大変危険だ。15日にチョーキングChowkingという中華料理のチェーン店で麺を食べたが口に合わず、客が食べていたハロハロというかき氷を追加して口直しをした。氷が入っているので心配だったが、おいしくてつい平らげだ。次の日は何ともなく幸運だった。

同じ生水を飲んでもあたるかあたらないか、胃腸の丈夫さなどの個人差があるだろうが、フィリピンの水道水などのインフラが相当貧弱なのは否定できないだろう。健康な青年だからすぐ回復し、「不運だったね」くらいで済んだ。栄養不良の乳幼児だったら、脱水症状を起こして死んでいたかもしれない。

経済力がある人はミネラルウォーターを購入できるだろうが、結局は個人的な防衛策で、社会的な解決策ではない。生水を飲むしかない貧困層は常に衛生上の危険にさらされている。フィリピンのような社会的インフラが貧弱な社会で最も打撃を受けるのは、貧困層の子どもである。



ココナツジュースの中にアイスクリームが入っている
いっしょに食べると美味

消費税増税も、物価上昇も、地球温暖化や環境汚染も、震災後の避難生活も、皆が同程度の影響を受けるのではない。貧困であればあるほど大きな打撃を受け、貧困が再生産されることになる。

どこまで社会が個人を支えるのかは、社会的な議論と合意で決めていくことだ。しかし、植民地支配が長く、その構造的問題が未解決のまま近代化されたフィリピンでは、一部の富裕層を守る利権構造が強固で、社会を変えていくのは大変な困難さがある。

誰もが安全な水と空気の環境を享受したい。
フィリピンの人たちは、人間として当たり前の

権利が保障される社会を実現するために、それぞれの現場で日々闘っていた。私もまた、はるか遠い道のりであっても、福島が希望の大地になるまで闘っていこうと思う。

〈フィリピーノ？フィリピーナ？

幸福ならどちらでも…〉

フィリピンで、素晴らしいと思ったことがある。女性になりたい男性が、そのことを隠そうともしないことだ。リンさんは嗅覚が働くらしく、「あの人オカマ」とすばやく私に教えてくれる。何でわかるの？と最初は不思議だったのが、そのような目で見れば、口紅を塗っていたり、しぐさや話し方が「女性的」な男性に気が付く。

15日にアンヘレス市の歴史博物館に行ったとき、売店の男性に、リンさんが「フィリピーノ？フィリピーナ？」と質問した。答えは予想した通り、「フィリピーナ」。フィリピンでは、女性でいたい男性に毎日1人2人見かけた。人数ではかなりいると思う。

日本で私はそのような人や同性愛者は一人も知らない。性同一性障害者に対する戸籍の変更などが認められるようになり、以前よりは寛容になってきているが、性的マイノリティに対する偏見はまだまだ強い。



バタアン公立高校での踊り 口紅を塗った男の子もいた

平等権や新しい人権の例として、同性愛を認めかどかたずねると、強い拒否反応を示す生徒がいる。他の人権を侵害していないのではないか。自分は饅頭（異性）が好きだが、ある人はケーキ（同性）が好き程度の、単に性的な好みの問題だと割り切れないかと問うても、絶対嫌だという。

日本より、自分のセクシュアリティ＝性的嗜好をオープンにできるという点でフィリピンのほうが幸せな社会だ。

ただし、男性でいたい女性には一人も会わなかつた。実は二重基準で、男性とは違い女性への社会的差別は強いのかもしれない。レディファーストの国だから一般の女性に対しては優しいが、例外的な女性の範疇から外れると攻撃されることも考えられる。

GNHというのがある。国民総幸福=Gross National Happinessと訳す。ブータンが提唱している概念で、GDPが経済的な規模の指標であるのに対して、個人の内面的な幸福度を測るためのものである。GDPと違って、数値化することは難しい。個人が個人として大切にされているか、マイノリティへの差別がものさしの1つになると思う。マイノリティが自分らしく生きられるフィリピンの方が幸福だろうと思った。

世界保健機構（WHO）の自殺率の国際比較（2012年）によれば、日本の自殺率は105国中で8位、10万人当たり24.4人である。一方、フィリピンの自殺率は87位、10万人当たり2.1人で、日本の12分の1である。自殺を禁じるカトリックである影響が大きいのだろうが、日本は孤立し、寂しく自死していく人が多いような気がする。日本は自殺大国だ。2012年は3万人を下回ったが、2011年まで連続14年間3万人以上の自殺者がいる。

東京に行くと「人身事故」でよく鉄道が止まる。

でも事故ではない。投身自殺だ。「事故処理」で少しでも遅れた電車の車内放送は、遅れたことを繰り返し、繰り返し、しつこいくらい詫びる。一体私たちは何に心をとめなければならないのだろうと心が痛むのだ。経済的な効率が最優先され、労働者の管理と分断が進んだ日本社会は、物質的な「豊かさ」も享受できず、精神的な孤立感に苛まれている人が多いと思う。

あなたは幸福ですか？と聞かれ、はいと回答できる日本人はどれくらいいるだろうか。
かくいう私も、正直自信がない。

〈戦争の悲劇を繰り返さないために〉

フェンスの外から想像するよりはるかに広大な土地だった。よく手入れされ、高校生がつい寝転びたくなるような青い芝。墓石とは思えないような白い大理石が、小高い丘に美しい曲線を描いていくつも建っていた。

明日は帰国という17日、アメリカ人記念墓地 Manila American Cemetery and Memorialを訪問した。1941年～45年までの太平洋戦争で犠牲になったアメリカ人墓地である。



美しいアメリカ人記念墓地
向こうに見えるビル群がグローバルシティー

パンフによれば、死者は17,097人。そのうちキリスト教徒の十字架の墓石は16,933、キリスト教以外の星形墓石は164。無名戦士は3,740人、一般

市民の犠牲者は36,286人埋葬されている。一般市民の犠牲者の名前や、作戦の解説用地図が、見上げるような高さの壁に刻まれ、回廊になっている。



キリスト教以外の人の星形墓石

広さは約30ヘクタール。スタッフが常駐するビジターセンターまである。また、私は行かなかつたが、カバナチュアン捕虜収容所の20,000人や、ガダルカナル戦の慰靈碑まであるようだった。

パンフには、戦争を勝利に導いたアメリカに感謝し、フィリピン政府が課税せず、永久に墓地を提供することも述べ、その「友好関係」をPRしている。



フィリピン人の犠牲者を悼む塔

8月15日は68回目の敗戦記念日だった。16日の『まにら新聞』には、在フィリピン日本大使館主催のカリラヤ慰靈祭に280人が参列したことを報道している。ト部大使は「多大な損害と苦痛を与えた歴史の事実を謙虚に受け止めなければなりません」と述べたという。日本とフィリピンの歴史は、太平洋戦争の侵略を抜きには語れない。

その15日に、私たちは特攻隊の出撃地である西クラーク地区の旧日本軍の基地跡を何か所か訪れた。親族を亡くした方の花束が供えられていて、犠牲者はフィリピン人だけではないことを思い知らされる。戦争で兵士は殺さなければ殺される極限状態におかれる。神風特攻隊員は、フィリピン人にとって加害者でもあるが、「名誉の戦死」を強いられた被害者でもある。彼らの、死に向かっていった一生を思いやった。石碑には、神風特攻隊を英雄として讃えるのではなく、日本とフィリピンの平和を願うために建立するとある。その思いに共感し、手をあわせた。

バターン死の行進という痛ましい歴史がある。1941年4月に勝利した日本軍は米兵とフィリピン兵を捕虜にし、マリベレスからサンフェルナンドまで約80kmを3日間歩かせた。虐待、炎天下、不十分な食料で、約16,000人が死亡した。バターン半島では、死の行進を1km毎に石碑を立てて、後世に伝えている。

神風特攻隊を知らない高校生がいたのには正直驚いた。福島県南相馬市原町区には特攻隊訓練のための飛行場があったことを、帰国後の毎日新聞の特集で知った。

若くして生を断ち切られた、物言えぬ死者の魂のために、かつてのような悲劇を二度と繰り返さないために、過去の歴史をきちんと伝えていきたい。

〈私は、日本を、変えたい〉

アメリカ人墓地に隣接して、フォート・ボニファチオ・グローバル・シティーがある。マカティ東に隣接し、もともと国軍の基地だったところで、フィリピン最大の財閥アラヤ一族に安く払い下げられ、開発が進められた新興都市だ。墓地を見下ろすように高級マンション群が立ち並ぶ。

1997年の香港の中国返還の時、香港の人たちが中国人になるのを嫌い、フィリピンに移住したのが始まりとはリンさんの説明。ラモス大統領(1992~1998年)の時に、フィリピン人が国内出資60%以上であれば、外国人も土地を取得できるようにしたという。

土地所有を外資に広げたことで、最も儲けたのは外国の大企業や富裕層だろう。

「かつては軍事的侵略、今は経済的な侵略」と、26年前にフィリピンに行ったときに、フィリピン人たちが批判していたのは、どちらも形を変えた人権弾圧だと言うことだ。少数の人たちが富を独占する社会構造を、日本を含めた海外の政府や企業が支援し、強化していると非難していた。

経済的な搾取は、戦争と違って目に見える戦死者も負傷者もいない。合法的に行われる資本主義の経済は、構造的な暴力になり、貧困層を搾取する。栄養失調で子供が死ぬのも、ゴミ山が崩壊して生き埋めになるのも、学校を中退するのも、貧しいからだ。

26年前と変わらないフィリピンの貧困と格差をつぶさに見てきた。あの時、「私たちは何ができるでしょうか?」の問い合わせに、フィリピンの人たちは「私たちは私たち自身でフィリピンを変える。あなた達は日本を変えてほしい」と言い切った。

かつて一億総中流と言われた日本の実態。2012年の日本のGDPは世界第3位。一見すると豊かなようだが、一人当たりにすると世界第13位に下

がる。内実を見ると、生活保護世帯は2012年に158万世帯以上に達して、過去最多を記録。勤労者の5人に1人の1,000万人が年収200万円以下である。過労死やワーキングプアを生む日本社会の貧困化をこのままにしてはならないと思う。当たり前の努力をすれば報われ、幸福な生活を送れる日本にしたい。

日本を変えるためには何ができるか、これからも学び、考え続けて行く。

〈命の「南北問題」〉

フィリピン料理レストランで、フィリピン赤十字本社の人たちとにぎやかなお別れパーティーを終えた16日深夜のこと。共同通信の三井さんとホテルのラウンジで話をしていると、彼の携帯が鳴った。船の事故があり、すぐに現場に駆けつけろとの指示があったようだ。

18日のまにら新聞に、三井さんが書いたのか記事が1面に出た。見出しは「大型フェリーが沈没 31人死亡、171人行方不明 セブ島沖で貨物船と衝突」。行方不明のお母さんを心配し涙をためている11歳少年の写真もあった。

なんとも痛ましい事故だ。フィリピンは船舶事故が多い。過去5年間の「主な」旅客事故が紹介されている。最多の犠牲者は、2008年6月22日のプリンス・オブ・ザ・スターズの、817人の死者・行方不明者の事故だ。

大学の新聞学で、「犬が人を噛んでもニュースにはならないが、人が犬を噛んだらニュースになる」と学んだ記憶がある。犬が人を噛むのはよくあることだが、人が犬を噛むのは珍事であり、だからこそニュースの価値がある。

2012年1月にイタリアの豪華客船、コンタ・コンコルディアが座礁し、乗客34名が死亡・行方不明になった。船長が真っ先に逃げ出し非難された

が、この事故は大きな記事になり、社会的な関心を集めめた。

日本に帰国してからいくつかの全国紙を見たが、フィリピンの船舶事故を報道している新聞は確認できなかった。共同通信や時事通信は、世界中に記事を配信している。「フィリピンの事故を記事にして伝えたいと思っても採用されないんですよ」と三井さんは悔しがっていた。フィリピン人の事故は犬が人を噛むようなニュースで、一顧だにされないのだろうか。

同じ人命でも、先進国の命と発展途上国のそれでは、まるでその重みが違うかのようだ。命にも「南北間格差」が存在する。

戻らない母を祈りながら待つ少年の心情と、彼を撮影し記事にした記者の心情が、ともに私の胸に迫り、少年の表情が頭から離れないのである。

〈変化は静かに、深く、着実に〉

フィリピンは雨季だった。福島の夏より過ごしやすいくらいで、時折り強い雨にあった。雨は貧困地区の弱いインフラを直撃し、道路を冠水させ、ゴミを散乱させる。バスで移動した私たちは影響はないが、一般の住民にとっては、日常茶飯のことだから、さぞかしいまいまいことだろうと思う。

ビリヤールさんに大きくて丈夫な傘を借りた。折りたたみ傘しかない私たちは大いに助かった。でかでかとビリヤールと書いてあり、最初どこかのブランド名かと思ったが、選挙用に使用したという。トランクに入らず日本を持って帰国できなかったが、ない人にあげたいくらい立派な傘だった。

日本よりもはるかに過酷な貧困と格差があるフィリピン。巨大モールとサリサリストアは、フィリピン社会を象徴しているようだ。

○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

日本のそれよりはるかに大きくて迷いそうなアジアで3番目に大きいモール・オブ・エイジアに行った。お金さえあれば何でも買えそうだ。入り口には警備員がいて、客の荷物を検査する。一方、道路沿いにある小さなサリサリストアは「庶民のコンビニ」。お菓子や日用品などの商品は、すべて小さな単位に分けられ売られている。鉄の格子があるのは盜難対策だろう。

フィリピン赤十字やソルト・パヤタスを訪問して、フィリピンの人たちが、厳しい現実の中、日々闘っていることを知った。組織は違っても、誰もが幸せに生きる社会を目指すという理念は同じだろう。Solidarity=連帯。26年前にも何度も聞いた言葉が、彼らの活動の本質を表している。

ソルト・パヤタスの資料に、「ささやかな存在でも、静かに、深く、着実に、浸み込んでいく塩になりたい」とある。1滴の水でも大海に小さな波紋を起こす。たとえ1人の小さな行動でも社会に変化を起こす。フィリピンに行くと行動を起こ

した時からその変化は静かに始まっている。高校生10人には、今回で学んだことを自分のものにして、成長していってほしい。学び成長し続けることが、フィリピン派遣の最大の意義だろう。

マニラ空港でリンさんと別れるとき、“I shall return.”と伝えた。帰国し、力をつけて、また再びフィリピンを訪ねるつもりだ。

私もまたソルトのいう「小さな挑戦」を続ける。



彼らがフィリピンの未来を担う カステロ小学校での演舞
詩の意味は分からぬが、意志は伝わる



日本赤十字福島県支部JRCフィリピン研修引率を終えて

福島県立平養護学校 教諭 青木由紀子



私は、2013年8月11日日曜日から、8月18日日曜日までの8日間、10名の高校生を3名の教師と

日本赤十字福島県支部のスタッフで引率して、フィリピンに研修旅行に行った。

事前研修を6月29日土曜日と7月27日土曜日の2回実施した。10名の生徒達は、アイスブレーキングの活動を通して、お互いのニックネームをつけたりしながら、次第に緊張もほぐれ会話も弾むようになった。しかし、その時点では、よさこい踊りの出来栄えは、まだまだ完成どころか、やる気があるのか分からぬような踊り方だった。

フィリピン研修の初日8月12日、台風上陸の心

配される中、集まってくれたラス・ピニヤス公立高校の生徒達が、優雅な伝統的な踊りを発表してくださった。彼らの心をこめたダンスを見て福島県のJRCメンバーも多くを感じたのだろう。振り返りタイム時の生徒の反省は以下のような内容だった。

「日本の生徒は強いからと言われたことで、ウルっときた。フィリピンでは学びたい。」「AEDに感動した」「英語力のなさを痛感。英語力の必要性を感じた。」「支部の学校の歓迎がすごい。よきこいをもう少し良くしていきたい。」「はだしで歩いていることどもを見た。」「学校で温かく受け入れてもらって嬉しかった。」「ゼスチャーで話せてうれしかった。」「笑顔で迎えてもらって嬉しかった。」「言えなかつたこと、できなかつたことが初日だから多かった。」「めっちゃダンスがうまかった。」「歓迎してもらって嬉しかった。学ぶことが多い。」という受け身的なものがほとんどだった。私たち引率教師からは、「明日も精一杯やろう！」「明日もテキパキと行動しよう。」「体調の自己管理をしよう。」「今日の反省を明日に生かそう。」「楽しくやろう。」と激励し、フィリピン研修旅行は始まったのである。

その生徒達が、フィリピンの皆さんに歓迎されることや、笑顔を向けられることで、その後のたった一週間で、様々なことを考えられるようになったように思う。

例えば、バスの中からの景色をただ眺めるのではなく、「どうして大きな看板の鉄骨たくさんあるのに看板は掲示されていないのか？不景気なのか？」と考えたり、バタアン原発に見学に行けば「電力不足なのか？」と疑問をもったり、JOLLIBEEというファーストフードショップの店先にいたアイタ族の子供たちを見れば、「あの子たちに私たちが何かできることはないのか？」と

考えたり、クラーク飛行場の救助訓練のトリアージフラッグを熱心に見学したり、日本人特攻隊の銅像の前で一心にお祈りをしたりなど、常に真剣なまなざしの生徒達がいた。

8月16日の見学先、メレンションMカステロ小学校という全校生徒7,300人の小学校を訪ねた時のJRCメンバーのよきこい踊りは、あの事前研修の7月27日の踊りと比べればプロとアマチュアの差ほどに上達し、息もぴったりあった素晴らしいものだった。生徒によれば「もっと踊りたい！」「やつとうまくなってきた。」「踊って喜んでもらって嬉しかった。」と思う出来栄えとなつたのだそうだ。全くその通りだと私も感じた。

また、パヤタス地区の貧困家庭の生活を見学させていただいた後の振り返り活動では、「2000年にごみ山の崩落事故があったというのに何故いまだにごみ山があるのだろうか？」「治安が悪いと聞いていたが、貧困の生活の中にいながら地区のさんは笑顔で歓迎してくれた。」と、感想は様々だったが、見て感じたことだけに留まらず、「生活に不便なことはないか」「政府への不満はないか」「皆さんにとっての赤十字はどういう存在か」という本質的な部分への疑問も抱き始めたのがちょうどこの5日目あたりからだったと思う。あと一週間長くフィリピンに滞在していたとしたら、生徒達のアクションは、共同通信の取材を受けるほどの内容になっていたかもしれない。

このフィリピン研修旅行の一週間で生徒達の何が変わったのだろうか。歓迎してもらったり、笑顔で迎えてもらったり、親切に声をかけてもらったりした「その受け身ながらも嬉しく感じた気持ち」を今度は、「自分達が相手を喜ばせたい」という気持ちに変化したのだろう。感受性の強く、若い高校生ならではの素晴らしい成長ぶりに私は、目を見張らずにはいられなかった。

この貴重な日本赤十字福島県支部フィリピンに研修旅行に参加させて頂いたことを深く感謝すると同時に、高校生の皆さんの今後の活躍に期待したいと思う。



フィリピン派遣に参加して

福島県支部 青少年赤十字指導講師 金子 久仁子

2011年3月11日の東日本大震災発生から2年を経て国際交流事業の「フィリピン派遣」が海外からの救援金による災害支援事業の1つとして県内の高校生から10名、引率教師が3名、支部職員2名の計15名の参加者で今年度再開された。

事前研修は正式には2回、生徒達が自主的に1回で計3回行われた。高校生は2名を除き初めての海外に不安を感じながらも期待を大きくして臨んだ様に思う。

フィリピンでは国際交流事業としてのフィリピン本社また各支部訪問及びフィリピンの小・中学校、高校の訪問を行った。他にバタアン原発、アメリカ人記念墓地、バンブーオルガン教会、サン・ギレモ教会、クラーク飛行場、神風特攻隊記念碑、タガイタイ市のタール湖の見学などを行った。

支部訪問の中には航空機事故の大規模な救護活動を見学させてくれたところもあった。交流事業ではフィリピン赤十字の本社、各支部、各学校とも盛大にもてなしてくれた。学校の交流でのもてなしの民族舞踊に対して自分たちが行う「よさこい」「着付け」「日本茶の披露」の完成度を高くして応えた。青少年赤十字のメンバーとの交流は最

初は硬い様子が見られたがフィリピンメンバーの明るく、元気に積極的に話しかけてくれたことでリラックスしていき、笑顔での交流になっていった。交流のポイントは英会話だとしてフィリピン本社の青少年担当者に「どうすれば会話がうまく行くか?」を熱心に聞いていたメンバーもいた。

バタアン原発（できてから旧ソ連の切尔ノブイリ原発事故、福島第一原発事故により一度も稼働していない）の見学は今回の派遣の中でも大きな意味を持っていた。見学した日は台風一過の天気だったが建屋の雨漏りや、管制室の設備の古さにこのまでの稼働は無理だと思った。コンクリート壁が1m、金属壁が50cmもあり、遮断されていると説明があった。そのことやCO₂排出量や安全性を言われても安心はできなかった。福島原発立地の高校生にフィリピン派遣や原発見学のことを話そうとして止められた事があった。地震・津波も原発事故もまだ心の整理が付いていない。友人・家族と離れなければならないだけでなく、今を何とかやり過ごしている状態だ。原発の見学ができる状態になっていないとのことだった。

交流や見学で貧富の格差を特に感じたのは移動

の車が駐車した時に会う物売りの人達、物乞いをする少年少女に出会った時やゴミ山の近くにあるパヤタスに出かけた時だ。宿泊するマニラは街並みもきれいで日本の都市部と変わらない様に見える。車も多かったし、ネオンや緑などきれいであった。そこから外れ1時間もしないうちに見た民家はトタン屋根のみすぼらしいものだった。物売りは別として少年少女に対しては「食べ物のようにものをあげるのは良いがお金はあげないよう」とアドバイスをされ、メンバーなりに接していた。パヤタス地区でメンバーたちは班毎に分かれ家庭訪問を行い、ソルト・パヤタス基金の奨学金をもらって学校に行っている家庭を訪ねた。後でわかったことだが4つの家庭の内、電気が通っていたのは1軒だけだった。他の家は電気も水道も通っていなかった。ライフラインの重要性は東日本大震災で痛いほどわかつっていたが、日常的に電気、水道、ガスが無いという厳しさがあった。私が行った家庭は3畳1間のスペースに米袋のカバーのかかった木の長椅子が1つポツンとあった。片隅に30cm四方のかまどがあり燃料は炭であった。暑く湿った暗い部屋であった。母子2人で生活し、母親は高校を中退した地方の出身者で夢は「子どもの教育課程を全うさせること」だと言った。教育を身につけることで職につくことができ、自立できるからだ。ほとんどの地区の公立小学校は1~3年生まで1日3交代で学校に来て授業を受ける。児童数が多く、子どもを3つのグループに分けないと学校の設備や教師の人数が間に合わないからだ。4年生からは2交代になる。学校に来る子供の人数が減るので、午前と午後で授業を実施する。学校からいなくなる子どもが

1/3いることになる。中学校、高校ではその数がもっと多くなる。学校を卒業していない人たちは安い賃金の仕事かその日暮らしになってしまう。厳しい現実や悪循環がフィリピンにはある。

そんな中で自分たちなりに強く生きている人にパヤタスで出会った。パヤタスでの交流でお母さんが「私たちは貧困であるがかわいそうだと同情をしないでください。自分たちはしっかりと生きて行きたい」と言った。日本のNPO法人がクロスステッチの技術を教え、作品を販売し、正常賃金を支払い、自立できる手がかりを作っていた。それが軌道に乗りつつあると説明があった。お母さんの言葉には貧困に負けない強さが伝わって来た。

高校生メンバーが何かを感じ自分なりの課題を見つけ、感じ、考えていた。表情が日々変わってゆき力強い、自信に満ちた顔になっていった。メンバー同士もお互いを思いやり、助け合って過ごした時間は忘れられないものになったと思う。そんな場面に立ち会えたことを何よりも幸せに思った8日間でした。



お世話になったフィリピン赤十字本社青少年赤十字の
シャローンさんと通訳のリンさん

フィリピン派遣事業の再開について

日本赤十字社福島県支部 ボランティア係長 石 田 政 幸

《訪問日程作成の背景》

本年度の福島県高等学校青少年赤十字の国際交流事業は、東日本大震災・東京電力福島第一原発事故（以下、原発事故）で中断した「フィリピン派遣」が、復興支援事業の一端として行われた。

この派遣再開が決定した後に重要なことは、これまでの派遣事業で主とした文化交流だけではなく、救援金等の支援への感謝のほか福島の現状を訪問先のフィリピン赤十字関係者や住民に伝えることである。

特に「絶対安全」であったはずの東京電力福島第一原発が、外部要因が一端とはいえ、万に一つも起こしてはいけない、放射性物質の大量放出という極めて重大な事故を起こした。日本国内でも他県から見れば福島の実状は正しくも十分にも伝わっているとは言えない。ましてや、海外においてはなおさらである。

《バターン原発》

この報告書を作成している時点で、原発事故から既に2年半以上が経過。直接的には、東京電力福島第一原発の事故により周辺に住んでいた住民が未だに苦しめられている。

県内他地域の住民も風評被害に苦しめられている。

震災後、偶然、ウェブサイトのひとつで、フィリピンに原発があるが、一度も稼動していないというものを目にした。

BNPP (Bataan Nuclear Power Plant=バターン原発)。場所はルソン島バターン半島のモロンという町。

福島の原発事故の影響によりバターン原発の稼

働停止が決定的となった。以前にも、アメリカスリーマイル島の事故や Chernobyl の事故ごとに反対運動があったそうだ。稼働中止後、地元NPOによりバターン原発がエコツアーリーとして見学受け入れを始めたことが掲載されていた。

もはや、一般市民が見学で福島第一原発構内や建屋内に入ることはないだろう。一方で、沸騰水型と加圧水型の違いはあるが、バターン原発により原発とはどういうものか、実物を見て内部構造の理解を図ることは、特に、福島県の人間には有用と思われた。

《文明のあり方をフィリピンに学ぶ》

余談だが、日本で赤十字創設に大きな役割を果たした佐野常民のことばがある。

法律の完備や精巧な機械を作るだけでなく赤十字の事業が発展することが文明開化（文明化）だと。（ビデオ：赤十字の生いたちより）

民主主義の国、フィリピン共和国では住民の反対運動によりせっかく巨費を投じて建設した原発を一度も稼働させていない。

日本においては、公害被害者に対する救済や補償が十分に行われてこなかった。例として100年前の足尾銅山での公害（鉱害）の悲惨な経験から何を学んできたのか（企業、国の役人、為政者）。

100年前も下流の町を護るために途中にある村の村人を強制移住させて村を干渉池として水底に沈めた。（谷中村）

今また、福島第一原発周辺住民から土地を取り上げて放射性ごみの置き場にするという。

足尾銅山の公害（鉱害）に立ち向かった田中正造の1912年6月のものとされることは、100年

を経た現在に通じる、というか今も変わっていない。非常に悲しく、また、過ちを繰り返す人種の愚かさだ。

真の文明は山を荒さず

川を荒さず

村を破らず

人を殺さざるべし

いま文明は虚偽虚飾なり、

私欲なり、

露骨的強盗なり

《戦争の歴史》

また、以前の国際交流事業では、訪問団が神風特攻隊の基地跡のあるマバラカットを訪問したことがあった。今回の訪問では、福島の現状報告と合わせて、フィリピンの原発視察、太平洋戦争の史跡を日程に盛り込んで、日本人はどう生きたのか、われわれはこれからどう生きるのかを考えることは有用ではないかと考えた。今回訪問の8月15日はまさしく日本の終戦の日だった。

《災害と向き合うフィリピン》

1992年にはピナツボ火山の火山灰が大雨のため泥流となって下流域をのみこんで町が消えた。いまだに泥流に埋まつままの人間が多数いる。アンヘレス市ではその泥流で消えた町の上に現在新たに町が作られている。

マニラ首都圏ケソン市支部の支部長（職業は医師、また、ライオンズクラブ員）によれば、フィリピンには年間27もの台風が襲来するのだと。

《訪問時期の選定》

派遣事業のたびに訪問団が無事帰国すると安心

するが、時期的には、大雨や台風は覚悟しなければならない。

8月20日からまりには国民の休日（英雄の日：故ベニグノ・アキノ大統領の記念日）が設定される。

訪問日程作成にあたっては、これらの障害も考慮にいれながら、平日を可能な限り効果的、効率的に活用した訪問日程作成が必要となる。

福島市をスタートして途中、数か所で貸切バスで派遣メンバーを次々拾って行くが、フィリピン到着が深夜となる便を選択せざるを得ず、アメリカ始発便ということもあり航空機の遅延や最悪成田から飛ばないリスクがある。

今年の8月は、デルタ航空機の運行が定時で行われており安心感があった。

《豊かさとは、貧しさとは》

今回は、福岡のNGO「ソルトパヤタス」がメトロマニラケソン市パヤタス地区に開設している支援拠点を訪問した。一般にはごみ山のある地区、スマーキーマウンテンとして名が通っている。

日本でも貧困家庭の問題についての報道が増えてきた。餓死者のニュースもいまや珍しくはない。日本に比べ圧倒的に低所得者が多いにもかかわらず餓死者がたくさん出ているとも聞かないフィリピン。通常のJRCメンバー訪問では、フィリピン赤十字社を通じた貧困層の訪問は実現がむずかしいと思われる。貧困層の住民訪問の実施より、ソルトの支援事業を通じて貧しさの中で住民がどのように暮らしているか、最下層の貧しさとはどのようなものかの理解を図った。

《今後の課題》

現地での福島の現状報告用にタブレットパソコンを用意し、パワーポイントで発表を試みた。フィ

○フィリピンを訪問して(派遣団員所感)

リピン赤十字本社、ラス・ピニヤスハイスクールは会議室や講堂のような場所で良かった。地方や小学校では、屋根だけのホールにおいての報告となり、危惧したとおり昼間ではかなり画像や映像が見にくくなつた。また、風によりスクリーンも揺れたり捻れたりした。

また、持参したポータブルプロジェクターは役にたつたし、薄形CDラジカセも重宝した。自分たちがわかるだけでなく、相手に分かりやすい報告の仕方、内容と資機材の適切な選択が大切である。

フィリピン赤十字本社と支部ではAcer等の外国メーカーのノートパソコンを利用することができた。

フィリピン赤十字、支部による事業の説明でも工夫を凝らした画像や映像が作成されていた。

パソコンソフトもパワーポイントほか、ワード、エクセルなど日本と同じく利用されている。

受け入れ側の都合もあるので、福島の現状がど

うかや同世代が関心のありそうなその他の話題について意見や質問を出し合つて互の理解を深めるということはやはり難しかつた。

また、ハイスクールとはいえ、フィリピンでは13歳から16歳までの4年制。日本でいう高校1年が最高学年である。

今後も派遣メンバーが自身で事実を調べ、考え、現地でも的確に福島の現状報告等ができるよう今回の経験が生かされ後輩へ引き継がれることを願う。



「フィリピンの格差解消に向けて」

福島県立福島高等学校 日 下 輔



今回のフィリピン派遣を終え、私は「貧困」や「格差」について真剣に考えることが多くなったように思う。

8月12日（月）～16日（金）までの5日間、小学校や高校など、3校を訪問した。小学校の子どもたちは、最初こそとまどいが感じられたが、2時間の交流の間にだんだん打ち解け、ダンスや伝統的な楽器の演奏等を披露してくれた。高校生は健康的な笑顔で私たちを歓迎してくれ、充実した日々を送っており、学校生活に満足しているようだった。

8月16日（金）に、4グループに分かれてパヤタス地区の家庭を訪問する機会があった。屋根はトタン板で、土間に入ると低い天井には裸電球が一つだけという家屋だった。子どもたちは、外でバスケットボールをして遊んでいたが、リングは錆びており、ボールもかなり傷んでいた。大人達は煙草を吸っていた。バイクに乗っている若者もいた。貧しさが伝わってきた。しかしそれよりも気になったのは、人々の目であった。大人たちの中には、私たちを怪しむように見る人もあり、ずっと眼で追われて少し恐怖を感じるときもあった。

同じフィリピン国内でありながら、どうしてこんなに人々の印象が違うのだろうか。前日までに訪問した学校と比較して、距離的には車で1時間ほどしか違わない。たったこれだけの距離の間に、「格差」としか言いようがないものがあるのだと思う。

13日（火）に訪問したバタアン ナショナル ハイスchoolの生徒達は、全体的に整った服装、身だしなみであったことから、家には安定した収入があるものと推測された。調べたところ、フィリピンの平均年収は国際労働機関（ILO）によると、約48万円。2011年のGDPは世界43位。経済状態は、アジアの中でも、この先上昇することが見込まれているという。しかし、それは出稼ぎによる外貨の獲得によるところが大きく、国内の経済はあまりよい状態はない。教育を終えても、国内に好条件の職がないため、海外に出稼ぎに行く人々が多い。割合にして国民の10人に一人が出稼ぎに行くという。

一方、パヤタス地区ではスモーキーマウンテンと呼ばれるゴミ山から拾う資源ゴミからの収入が主となる。一日の収入は50ペソから100ペソといわれ、400ペソ（法定最低賃金）を大きく下回っている。生活は苦しく、学校に通うことができない子どもたちも少なくない。その結果、十分な教育を受ける機会が得られないまま大人になり、安定した収入を得ることも難しくなり、結局ゴミ山から離れることも難しくなるものと考えられる。幼少期からの教育が、将来を決定してしまうのだ。

ILOとフィリピン国家統計局による「2011年子ども調査：フィリピンの児童労働」によると、5

自由研究

~17才の子ども2,900万人中、550万人が働き、その内約300万人が危険で有害な労働に従事していることが明らかにされている。この事態を打開するため、現在、フィリピンでは全国的な反児童労働キャンペーン「バタアン・マラヤ：児童労働のないフィリピンへ」が実施されている。

格差の解消には第一に教育の機会が子どもたちに保証されることが必要である。すでにWFP（国連世界食糧計画）による学校給食プログラムの活用もなされており、子どもたちの栄養状態改善と教育の機会提供に役立っている。同時に児童労働も含めた雇用状況の改善が進められなければならない。そして、受けた教育を生かせるような職がフィリピン国内にあることも求められる。これらの課題は、どれひとつとっても容易なことではない。しかし、フィリピンで見た子どもたちは貧困地区であっても生き生きとしており、人懐こい笑顔を浮かべていた。私はこの子どもたちが、この

人懐こい笑顔を大事にしながら、将来、国内の経済や政治について語り、どのような国を作っていくかについて積極的に議論を進めるような大人になってほしいと願う。そのために日本で暮らす私に何ができるか。私も学び、考えていきたいと思っている。



「フィリピンの貧富の差、貧困問題について」

学校法人松韻学園福島高等学校 2年 鈴木 悠太

フィリピンの首都マニラには、たくさんの高層ビルや、立派な家、ホテルなどが立ち並んでいた。高層ビル街から車でおよそ10分の移動でスラム街に出る。スラム街に並ぶ家は壁が汚れ窓は割れているなど半壊している家がほとんどだ。近くに高層ビル街に暮らす富裕層がいる一方で、土地を持たず、台風で屋根が吹き飛んでしまうような家に暮らす人々がいることがフィリピンの現状だ。

行く先々の街中に目を向けた時にも、きちんとした衣服を着ている子供がいる一方で大人の衣服を上に1枚だけ羽織り、裸足で歩いている子供がいた。フィリピンに行く前に貧富の差が激しいと

は聞いていたが、ここまではっきりと分かれていくとは思いもしなかった。また、道を歩いている際に、お金や食べ物を求めて近づいてくる子どもがいた。子どもに食べ物を上げると喜んで親のところまで持っていたが、その子の親は子どもから食べ物を取り上げ、一人で食べてしまったのを見て衝撃を受けた。貧困層の人々の生活は非常に大変で、貧しさの中で、何とかその日その日を切り抜けようとしているように感じ取れた。

貧富の差について調べてみたところ、フィリピンは人口の1割に満たない富裕層と1割強の中流層、そして、8割を占める貧困層という状況が実

自由研究

態だそうだ。富裕層は広大な敷地にガードマン、子守、お手伝い、庭師、運転手など数十人の使用者を雇った生活をしているのに対し、貧困層の生活では、十分な収入を得られる仕事はとても少なく、食べるのにも困難な生活を送る人々が多数存在している。所得が月額8千ペソ（約2万円）以下の家庭が非常に多いとのこと。子どもを学校にやる経済的余裕はあまりなく、子供は小さい時から家事や親の仕事の手伝いがほとんど、また電気や水道は自分の所まで電線と水道管を引かなければならず、道路から遠い家には電気も水道もないそうだ。

私が目にした差はここまで広がっていなかったが、実際は富裕層と貧困層とで大きな差があることがわかった。これだけの貧富の差は日本では考えられない。まだ国全体が貧しくても、全員が貧困層で貧富の差もあまりなければ気持ち的に救われる部分があるかもしれないが、貧富の差が大きい中で生きている貧困層の人々のことを思うと心



が痛む。

フィリピンの格差問題の現状を変えるために、貧困地区において、住民の助け合いグループの設立を支援する。住民が就職しやすくなるよう、職業訓練を実施する。雇用対策を行うよう、フィリピン政府に訴える。などの取り組みが必要なのではないか。そして、政府や国連、NPOだけに頼らずに貧しい人々自身が貧困のない社会の実現に向けて活動を続けてほしい。また、先進国に生きる自分たちがフィリピンやその他の貧困問題を抱えている国に積極的に協力していくべきだと思う。

格差問題や、貧困問題などフィリピンが抱えている問題はまだまだ存在する。そしてその問題はフィリピンだけに限らず世界のあちこちに存在している。私たちが解決に向けてできることは数少ないかもしれない。だが、この現状を1人でも多くの人に知ってもらい目を向けてもらいたい。

「フィリピンの貧困について」

福島県立本宮高等学校 2年 普通科 仲 川 優 葵

フィリピンに到着してすぐ、衝撃を受けた。私に手を伸ばして「お金を頂戴」と言っていた少女や「これを買ってください」「食べ物下さい」と私たちの周りに集まってきた人々に困惑し戸惑ってしまった。それと同時に、私は彼女たちの生きたいと訴えている目に圧倒させられてしまった。彼女たちは貧しいから野菜や民芸品を売って生活費にしているそうだ。日本では彼女らのような人がいないので、これが貧富の差なのか目の当たりにしてとても悲しくなった。

一番印象に残ったのはパヤタスだ。パヤタスとは、政府の再開発のために別の地区から立ち退きさせられたスラム住民のための再定住地だったが、マニラで住む場所を失った人々や、地方農村から仕事を求めて来た貧しい人々が移住してきている。117,001人（世帯数24,193）が住んでいる。また、ゴミ投棄場があり、そこに、ケソン市から出るゴミ120トンが運び込まれる。そのゴミを拾い再利用出来る物を売って生活している人をスカベンジャーと呼ぶ。そのスカベンジャーが、回収するものは、プラスチック、金属類、ビン、紙、木材、食べ物、などである。パヤタスでは3,000人がスカベンジャーとしているが、彼らの一日の収入は約200円～300円という驚くほど少ない収入しかない。

パヤタス・ダンプサイトは、かつてスモーキー・マウンテンと呼ばれる最終処分場が存在していた。だが、各国から「フィリピンの貧困の象徴」として各国の批判を浴びたため閉鎖された。その際スモーキー・マウンテン周辺で廃棄物を拾っていたスカベンジャーの多くがパヤタスのゴミ投棄場周辺に移住してきた。彼らには新しい住居が用意されていたものの、その高額な賃料が払えな

かったのである。パヤタス・ダンプサイトには膨大な廃棄物が分別無しに集められ巨大なゴミの山が作られた。その周辺にはスカベンジャーが住み、有価物を買い取る業者の仮設住宅までもが建ち並び、スモーキー・マウンテンに勝るとも劣らないスラムが形成となった。

パヤタス・ダンプサイトの問題は、有害な科学物質や腐敗したゴミ山から発生するメタンガスによる住民の健康被害である。環境アレルギーで苦しんでいる人は多い。

もう一つの問題は、住民が、命を落とす危険と常に隣り合わせで生きているという点である。ゴミ山の崩落事故が、2000年7月10日午前8時に、実際に起きてしまった。2ヘクタールの地域を飲み込み500軒のバラック（仮設住宅）を飲み込んだ。このバラックには2,000人前後が住んでいた。フィリピン政府の報告によると死者は、234名。身元不明者は、60から70名。2010年6月時点でも82名が未だに、行方不明という報告が出ている。実際の死者数は300を超えるという説もある。この事故により世界的にパヤタスが知られたとともにフィリピン全土でも知名度が上がりパヤタス＝「不潔で悪臭がし、病気持ちである」といった認識、差別が強まった。

実際にパヤタスに行ってみると、家の近くや道にゴミがあちこちに落ちていた。蝇が沢山飛んでいて衛生的ではなかった。私たちは、そこに住んでいる家族を訪問した。家は、レンガ造りでとても狭く、家の周りには、ゴミが落ちていた。お母さんは、マッサージをして収入を得ているが、1日の収入が50ペソ（約100円）に満たない時が多いと話していた。一番上の子は、街に行って、ビラ配りの仕事をしているが、母親同様、少ない収

入しか得られないようである。家族全員が、お腹いっぱいに食べられない暮らしをしている。米を食べられない日もある。現在、厳しい生活をしている家庭であったが、将来の一筋の光がさしているのを感じる話を聞くことができた。子どもの一人が、国からの補助金を受け、理工系の大学に入学した。その子は、将来、IT関係の会社に就職したいという夢があり、家族もその夢の実現を強く願っていた。大学で学ぶ彼は、「将来は、IT関連の会社に入り、家族の生活を楽にさせたい。」と笑顔で話してくれた。その家族は子どもが、5人もいてとても裕福とは言えない生活をしていた。しかし、親が子を思い、子が親を思うフィリピンの家族の愛情は深いと感じた。

訪問が終わり外に出ると本当に多くの子どもがいた。その1人にトピックアルバムをあげるととても喜んでくれた。

パヤタス。そこは私たちと同じで多くの人が住んで、家族がいて友達がいて…そういう面では私たちと違いなんてないと思った。だから差別や軽蔑があるのはとても悲しい。

パヤタス・ダンプサイトは未だに大きくなり続け止まることを知らない。だから周辺に住んでい

る住民は、強制立ち退きをさせられる。立ち退きさせているのは政府と聞いて驚愕した。これがパヤタスの現状なのだ。ゴミ山崩落事故で多くの命が消え、まだ見つけてもらえてない遺体もある。多くの人々が傷つき、悲しみ、ぶつけようのない憤りを感じたのだ。だが、大きくなるパヤタス・ダンプサイトは誰にも止められない。私は「同じことを繰り返すだけでは…？」と思った。しかし、今はどうすることも出来ない。だから見てきたこと感じたことを多くの人に伝え、現状を伝えたいと思った。また将来はパヤタスのために出来るボランティアをしたいと思う。

パヤタスの皆さんのがより良い生活がおくれますように…



パヤタスの友達と一緒に(*^-^)



「フィリピンの災害について」

福島県立郡山北工業高等学校 機械科 3年 橋 本 裕 太

私がフィリピン滞在中に現地の赤十字を訪問して最も興味を持ったことは、フィリピンで起こる災害がその規模や被害などが日本とは異なっており、そのため赤十字の設備や災害時の対応にも違いがあることだ。帰国後、フィリピンで発生する自然災害とその対処法について調べ、私たちがそこから何を学ぶべきか、また私たちができる支援

とは何か、を考えてみた。フィリピンでは特に台風被害が多く、その度に赤十字が活躍する機会も増えることを知り、その点に特に着目してみた。

台風がフィリピンに上陸する数は年間15から20と日本と比べるとかなり多い。台風の定義は、熱帯低気圧のうち中心付近の最大風速が約17m/s以上のものをいう。フィリピンでは台風による死

自由研究

者の数は年間平均300名と言われている。特に近年では2000年の台風24号により死者約1,020名と、甚大な被害を及ぼした。この年からフィリピン独自のアジア名を台風に付け始めた。その後、2006年の台風21号（ドリアン）、2011年の台風21号（ワシ）、2012年の台風ボーフアでは、それぞれが約1,000名の犠牲者を出し、行方不明者も多数発生した。直接的な被害だけでなく、水害による病気や土砂崩れなどの二次災害も見られる。



それらの災害に対してフィリピン赤十字では、赤十字社内で気象予報の大画面が設置されていたり、台風災害救助用に整備された専用車があつたりしている。また、2次災害の防止のため整備車両などに薬や食事の衛生が管理できるよう調理スペースが設けられている。今年日本でも台風による被害が発生したがその際日本赤十字社では救援物資を送ったり、各赤十字支部の被害・活動情報を集めたりした。

日本とフィリピンの赤十字活動を比較して気がつくのは、活動全体としては同じようなものだが、フィリピンは台風に特化した設備・装備がとのつっている。対して日本は、救援物資など様々な災害に利用できるものを備えている。

このような災害が起こった時、または起こる前、高校生の私たちにできることは何だろうか。まず第1に募金活動である。日頃の募金活動は、いつどのような災害が起きても対応できるようにする

ための備えである。また、緊急支援が必要な際には、JRCの一員として、率先して行うべき活動である。東日本大震災の折にも他県のJRCが即座に募金活動をしてくれたことは決して忘れてはいけない支援のひとつであったし、フィリピンなどの日本に比べて貧困率の高い国々からも様々な緊急支援を受けたことも、今回の訪問であらためて知ることができた。

次に日本だけでなく、海外で発生した災害とその支援についての情報に目を向けることである。東日本大震災をはじめとする国内の災害については迅速かつ長期にわたりニュースなどで情報が提供されるが、海外の災害についての報道は一時的であることが多いように思われる。フィリピンの台風による被害をはじめ、ハイチでの震災後の様子なども今の日本ではほとんどわからない。フィリピンを訪れ、日本との災害時の対応の違いを知った今、積極的に海外の災害ニュースに关心を持ち、一時的に募金して終わるのではなく、その後の復興の様子にも关心を向けることが、継続的な支援のためには必要だと思われる。それをJRCメンバーと共有することで、より意味のある活動ができるようになるのではないだろうか。

フィリピン派遣の中で、赤十字以外にも海外で活躍する支援団体があることを知った。今後、赤十字をはじめとして国連関連機関やNGOの活動にも関心を持ち、日本だけでなく世界で起こる災害と救助やその後の支援や防止策について、さらに理解を深めたい。そして、さらに様々な研究に携わり、人的被害を最小限にするための予防措置や設備をはじめ、災害が起きた際の緊急援助やその後の支援のあり方を学び、日本とフィリピンをはじめとする支援が必要な国のために貢献したい。

出典 ウィキペディア、日本赤十字社ホームページ、
フィリピン赤十字社ホームページ

「貧困地域とフィリピンの強さと温かさ」

福島県立須賀川高等学校 2年 安藤摩耶



フィリピンは、日本と比べると決して経済的に豊かだと言えない。例えば、フィリピンでは学校に通える子供が日本よりも少なく、職に就けない人もいて、生活費を親せきなどから貸し借りするのが習慣になっている現状もある。また、私たちからは「貧困」に見えても、それ以外の生活を知らず、その生活から抜け出せずにいることもあるようだ。

そのような状況にありながら、私が約1週間フィリピンに滞在して今思うのは、私たちを迎えてくれたフィリピンの人たちの温さと強さであり、それは何に起因するものなのか、ということだ。日本以上に貧富の差は大きく、辛いことがあるはずの人たちも、私には笑顔で頑張っているように見えた。日本であればあまり見られない状況での人々の表情が、私には不思議に思え、幸せとは何なのか考えさせられずにはいられなかった。

派遣期間中には何度か「貧困」の現実を目の当たりにする場面があった。高速道路のサービスエリアの柵の外から手を出し、「お姉さん、お金ちょうだい。」と何度もねだる女の子。賑やかな街の一角で靴もTシャツも着ず、ズボンだけで、ミニカーで遊ぶ男の子。貧困地域の小さな家で

「1日、コーヒー1杯の日もあるの。」と笑って話すお母さん。経済的に豊かな日本にいる私にとって、初めて見た光景だった。しかし、その状況とはうらはらに、表情はとても明るく、どうして辛いのに笑っていられるのか私には不思議だった。貧困地域の家庭を支援する「ソルトパヤタス」のツアーの最中、ある家庭の女性にその理由を聞くと、子供たちを不安にさせないためと答えてくれた。日本だったらどうなのだろう、と私はその時思ったし、何より本当に生活が困難な状況にある家庭に見ず知らずの外国人を招いてくれることなど、日本では到底考えられないことではないだろうか。

どうして、フィリピンの人たちは日本人に比べ明るく温かい人柄なのか、子供の頃の遊びに注目して考えてみた。そこで、私たちと同世代のフィリピン赤十字のボランティアの女子と訪問先で出会った方に、小さいころによくした遊びやどんな遊びが好きだったか尋ねてみた。返ってきた答えは、8本くらいのビンを立ててスリッパを投げてそのビンを倒して遊んだという答えだった。また別の成人女性に同様の質問をしたところ、手作りの人形でお人形遊び、バトミントン、鬼ごっこなどだった。

ほんの数人の人たちへのインタビューだが、この質問の結果から、身近にあるものから自分で工夫して何かを作り、誰かと一緒に楽しめる遊びをすることが分かったような気がした。日本では、今時の子どもの遊びと言えば、家の中でゲーム機などで遊ぶのが一般的ではないか。家庭用ゲーム機で遊びすぎるせいで視力が落ちたり、体力が低下したり、ゲームやパソコンへの依存などの問題

自由研究

が起きる場合もある。ネット上の友人関係のトラブルも後を絶たない。

かつての日本でも、今より外で友達と遊んだり、手作りのおもちゃで遊んだりした時代があり、その遊びを通して人間関係や生きる知恵を学ぶことがたくさんあったのかもしれない。フィリピンでも、富裕層の家庭では日本の子どもたちのようにゲーム機で遊ぶ子どももいるだろう。しかし、私が目にした限りでは、まだ多くの子どもたちは、かつての日本のように外で友達と遊んだり、親の手伝いをしたり、幼い頃から、同世代や大人との人間関係を通して、人に対する優しさや思いやりを学んでいるように見えた。その結果、フィリピンの人たちは、見ず知らずの人間に対しても温かく接し、貧困にあえぎながらも地域や親せき同士で協力して困難に立ち向かえる強さを持ち、笑顔を絶やすことがないのではないだろうか、というのが私の結論になった。

私が見たのはほんの一部かもしれないが、日本とフィリピンとの幸せのベクトルの違いを肌で感

じることができた。日本では、いつでもすぐに好きな物を食べられたり、好きな物を買えたりする幸せがあるが、フィリピンではそれが当り前ではない現実が存在し、一見すると日本よりも幸せではないように見える。しかし、逆に、家族や友人との関係を考えると、いじめや家族内のトラブルがニュースになる日本に比べて、フィリピンは家族や友人との時間を一番の幸せと思っているようで、貧しくても日本よりはある意味幸せなのかもしれない、今回出会ったフィリピンの人たちの笑顔を見て思った。

私の将来の夢は、看護師になることだ。その夢を叶え、将来は健康や衛生面で困っている国の人たちを支援する活動をしたいと考えている。今回の派遣で、そのためには、些細なことにも一生懸命に取り組める思いやりや優しさが幸せへの第一歩だとあらためて考えられるようになった。JRCのどんな活動にも同じ気持ちで取り組んで、フィリピンで出会った人たちに負けない暖かさと強さを身につけた看護師になりたいと思った。



「貧困をなくすために」

福島県立猪苗代高等学校 3年 中村 アイリン

中学校3年生のころ、昼休みに図書室で興味のある本を見つけて読むことが私の日課のひとつだった。ある日、新入荷のコーナーに池間哲郎さんの『あなたの夢はなんですか？そのとき少女はこう答えた。私の夢は大人になるまで生きることです。』という本が真っ先に目に入った。そこには、今回の派遣先であるフィリピンのスモーキーマウンテンや、どれだけフィリピンが貧しいかをはじめ、中国の壳春、モンゴルのマンホールチルドレン、さらには日本における貧困についても書



パヤタス地区から見えるゴミ投棄場の一角。

自由研究

かれていた。私の母がフィリピン出身ということもあり、その本を読んで胸が締めつけられる気持ちになったのを今でも覚えている。私はこんなにも裕福な国にいて、何か自分にできることはないだろうか、という気持ちが芽生えた。その頃に初めてボランティア活動を経験し、将来アジアの貧困国を救いたいという夢も持ち始めた。そして、いつか実際にフィリピンのスモーキーマウンテンに行くというのも小さな目標となっていた。

今回のフィリピン派遣の6日目に実際にその地を訪れることができた。私たちが訪問したのは日本のNPO「ソルトパヤタス」だ。ここは、貧しさで学校に通えない子どもたちのために奨学金を提供したり、地区の女性に刺繡などの技術を教え、各家庭の自立支援を行っている団体だ。

スモーキーマウンテンとは、直訳すると「煙の山」で、その由来は、1954年にフィリピンの首都マニラのゴミの投棄場となった場所で、それらのゴミが自然発火し、煙が上がる山となったためスモーキーマウンテンと呼ばれるようになった。そこに住んでゴミの中からアルミ缶など拾い僅かな収入を得る人たちはスカベンジャーと呼ばれている。1994年に国のイメージダウンになるという理由から、ごみ捨て場の廃棄物利用が停止になった。そこでくらす人たちは、利用停止から1年後、強制的に違う場所に移住させられることになった。国から住居は提供されたものの、家賃を払い続けられるほどの収入がなく、結局第二の新しいゴミ投棄場であるスモーキーバレーに移住し同じ生活をしている。そこが、今回私たちが訪れた場所だ。

実際にやってみると、ゴミ投棄場に直接入ることは出来ず、離れた場所からその様子を見ることしか出来なかった。しかし、ゴミ山の崩落事故で亡くなった人たちのための慰靈碑を参拝し、事故の悲惨さをあらためて認識することができた。

このような悲惨な事故や、貧困で苦しむ人たちを目にすると、何かできないかといつも考えてしまう。それは私がJRCのメンバーであるということだけが理由ではないような気もしている。このフィリピン派遣に参加する以前から、世界を貧困から救うための活動をしている団体や個人にとても強い興味を持ってきた。

フィリピンだけでなく世界で貧困で困っている人たちを救うために、どんな小さなことでも支援をしたい、力になりたい。そのために私たちが出来ることは何か。ふだん何気なくしている募金はちゃんと役立てられているのだろうか。ソルトパヤタスのように、その支援をしてくれる場所や団体は日本や世界にどれだけあるのだろうか。これらのことを探ることだけでなく、活動内容や支援実績を調べることも、私たちができる大切な国際協力であり、貧困問題解決の第一歩ではないかと私は考えている。

私が興味を持っているNGOの例

「LOOB（ロオブ）」

<http://www.loobinc.com/index.html>

フィリピンが抱える教育・環境・食・雇用の問題の解決を目指す。スタディーツアーやワークキャンプ、チャリティーイベントを実施。教育・医療サポート、フェアトレードショップの運営、物資や衣類の寄贈などの活動をしている。団体の「一方的な支援でなく、現地の人と共に学び成長する」というモットーに魅力を感じる。

「アクセス」

<http://www.page.sannet.ne.jp/acce/index.html>

フィリピンの貧しい人々も日本で暮らす

自由研究

人々も、ともに地球市民として「貧困を始めとする私たちが抱える社会的な課題を、1人1人が主体となって解決し、より良い社会を作っていく」ことを目指す。書き損じハガキや未使用の図書券、CD・DVDなどの寄付受付。フェアトレード事業やスタディーツアー事業などが主な活動。※フェアトレードとは、公正貿易のことで、途上国の生産者に公正な賃金や労働条件を保証した価格で商品を購入することにより、途上国の自立や環境保全を支援する国際協力の新しい形態。

「JANIC（ジャニック）」
<http://www.janic.org>

『NGOを支援するNGO』を活動方針にしている。直接的な支援だけでなく、NGOとNGO、NGOと企業、市民のみなさん、政府・自治体など、これらすべてをつなぐ役割を担っているので、自分がどんな活動をしたいか考えるときに役に立つ。

「ワールドビジョン」

<http://www.worldvision.jp/>

「セーブザチルドレン」

<http://www.savetchildren.or.jp>

どちらの団体も、貧困や紛争の犠牲となる子どもたちの支援に力を入れている。

「日本とフィリピンの文化の違いについて」

福島県立いわき総合高校総合学科 1年 田中 さくら

私は、フィリピンに行って日本とは異なる文化に触れた。そこで私は、日本とフィリピンの異文化について調べてみることにした。

○食文化について

日本では、食事の際に右手でナイフ、左手でフォークを使って食事をしている。しかし、フィリピンでは右手でスプーン、左手でフォークを使って食事をするのが一般的なようだ。箸を使う習慣もあまりないようで、ワンタン麺を注文した際にも、スプーンとフォークが出された。普段、麺類をフォークで食べることがあまりない私にとって、とても不思議な感覚だった。お米も細長い形をしていてパラパラしたインディカ米と呼ばれるお米で、日本ではタイ米として多く知られている種類のお米が食べられていた。日本で食べら

れているジャポニカ米はモチモチとした粘りのある食感なので、対照的な食感だった。また、ご飯は日本のようにお茶碗によそうのではなく、プリン型にご飯が盛りつけられていて、それを崩すようにして食べていた。そして、私が一番驚いたのは、食事の際に出されるアイスティーがとても甘いということだ。いろいろな学校や施設を訪れるたびに、アイスティーを出していただくのだが、どこのアイスティーも甘くて、たとえるなら炭酸の抜けたコーラのような味がした。

○遊びについて

現代の日本の子供たちにはテレビゲームやカードゲーム、携帯ゲームなどが人気の遊びのようだ。中・高生にはカラオケやプリクラなどが、人気がある。それに比べて、フィリピンではバスケッ

自由研究

トボールやバレー、チェスなどが人気の遊びである。私が、小学校を訪れた際にも、子供たちがバレーをしたり、バス移動の最中もバスケットボールをしたりしている中・高生を見かけた。バスケットボールはフィリピン全体で人気のあるスポーツのためか、街中にもバスケットコートが多く見られた。日本は室内での遊び、フィリピンでは屋外の遊びが多いということが分かる。日本はあまり体を動かさない遊びが人気な遊びとなってきているので、もう少しフィリピンの子供たちのように、体を動かすような遊びをするべきだと私は思った。

○お手洗いについて

日本のトイレは個室ごとにトイレットペーパーがついていて、使用した紙はそのまま流すのがあたりまえだが、フィリピンでは各個室にトイレットペーパーがついていることが珍しく、使用した紙は便器の脇に置いてあるゴミ箱に捨てる。これは、フィリピンで使われている便器の水が流れる穴（トラップ）が狭いため、紙を流すとすぐに詰まってしまうからだそうだ。また、水の入ったバケツと桶が置いてあるところは、その水で洗い流すという仕組みのようだ。大型のショッピング

モールには大きなロールのトイレットペーパーが鏡の脇に置いてあり、入る前に使用する分だけ自分で取るというようなシステムの場所もあった。トイレの標識も日本とは異なっている。日本は、男性は青、女性は赤と標識の色が分かれていることが多いが、男女の区別をなくすためにフィリピンでは一色で表示されることが多い。こういったことから、日本とフィリピンの男女の考え方にも違いがあることが分かる。

同じアジアに位置する国同士でも、たくさんの異なった文化があるということが分かった。同じ道具を使っていても使い方が違っていたり、同じ料理でも味付けが違っていたりと異文化を知れば知るほど面白かった。お互いの文化を理解し合い、今後もっと交流を深めていきたい。



「パヤタス地区のゴミ投棄場の現状とそこに暮らす人びと」

福島県立喜多方高等学校 1年 新田万里子

私が、今回の派遣で一番印象に残った場所はパヤタス地区のゴミ投棄場だ。パヤタス地区に行く前は、テレビなどを通して得た情報から、地域の住民はみなゴミ投棄場へ行き、利用できそうなゴミを探し、中には幼い子供がいて、時にはゴミ投棄場に発生する病原菌に感染し、治したくても治

療費がなかつたり病院がないために亡くなる人が多い、というような想像していた。

マニラ首都圏からバスで約2時間の距離にあるケソン市のパヤタスという地域の広大なゴミ投棄場には、分別もされないまま次々とゴミが運ばれてきて、強い日差しの中で化学変化し、自然発火

自由研究

して煙をあげている。強烈な悪臭と暑さの中、捨ったゴミを廃品回収業者に売って生計を立てている人たちがいる。ゴミが捨てられ続ける限り、ゴミを拾えばわずかな収入をえることができる。ゴミ投棄場の近くに小屋を作れば、家族と暮らすこともできる。しかしその家は崩落などの危険がある場所であり、悪臭や煙もあがっている、健康に害を与えている場所でもある。結核、盲腸、破傷風など、日本なら治るはずの病気でさえ、命を落とす人がいる。

パヤタスに住んでいる人たちの大半は、田舎や近隣の島々の出身だそうだ。都会のマニラに仕事を求めてやってきた人々は、貧しい農村や漁村の出身で、学歴もないために失業率の高いマニラでは仕事を持てるチャンスはほとんどない。安い賃金でも働ければ良いほうで、路頭に迷う人たちも出てくる。そんな人たちが、将来を期待して移り住んでくる場所がパヤタスだ。

今から13年前の2000年7月10日、前日から降り続いた台風の影響を受け、高さ30メートル、幅100メートルに渡りゴミ山が崩落し、約2ヘクタールの地域を飲み込み、500軒のバラックが下敷きとなった。公式死者数は234名、身元不明者も60~70名いた。現在も82名の行方不明者がおり、実際の死者数は300名以上なのではないのかと考えられているが、1,000名という話もある。当日は小学校・中学校は休校となっており、普通ならいないはずの多くの子供たちが家にいて、犠牲者となつたという悲しい歴史がある場所でもある。

私が訪問した家庭では、59歳の女性から話を聞くことができた。彼女は1968年にサマールという街から移住してきた。その当時は、家政婦として働き月40ペソ、日本円で85円の収入があり、毎日なんとか暮らしていける金額だったそうだ。そして1973年に今の旦那さんと出会い結婚した。しか

し1988年にゴミ投棄場の関係で住んでいたところを立ち退きになり、今住んでいるパヤタス地区へきた。子供は8人いて、今は孫の面倒を見て暮らしている。長男が毎日150ペソ届けてくれて、食材は近くのマーケットで購入していると話していた。しかし今住んでいるところも、ゴミ投棄場の拡大に伴い政府から立ち退きの対象になっているらしい。彼女に今の夢を聞いたところ、一番下の娘さんが奨学金をもらい大学に行ってくれることだという。その子が無事に大学を卒業することが私の夢だと、笑顔で言っていた姿が印象的だった。

私は今回いろいろな話を聞いて、予想した通りの部分もあったが実際聞いてみると分からぬところもたくさんあり、自分が日本で見聞きすることだけが全て正しいとは限らないのだとわかった。建設作業員やメイド、洗濯、刺繡商品の生産・販売など、安い賃金でも日常的な生計を立てている人たちもいて、私はみんなゴミ投棄場へ行っていると想像していたので、正直おどろいたのと同時に申し訳ない気持ちになった。もちろん日本と比べて満足な環境での生活をしているとは言えないが、生きていくために困らず、家族と仲良く暮らしているという意味では、貧困には違いないが悲壮感のようなものは感じられず、前向きに現実と向き合っているというのが私の実感だ。

パヤタスの子供たちはみんな笑顔で、私の名札を見て“Nitta!”と大きな声で名前を呼んでくれたり手を振ってくれる姿を見てとても嬉しくなった。今回このフィリピン派遣に参加できなければ、フィリピンのゴミ投棄場に行く体験なんてできなかっただろうし、自分の思い込みを見直すことができた良い機会になった。この派遣期間中の体験をいろいろな人に伝え、少しでも貧困地域の家庭の生活が向上できるように募金活動などに積極的に協力し、世界の貧困問題の解決に向けてこ

自由研究

これからも学んでいきたいと思った。

* 参考 ソルト・パヤタス現地体験プログラム
ガイド
フィリピン マニラ事務所
福岡事務所
福島第一原子力発電所事故ホームページ



「フィリピンの赤十字活動とフィリピンの現状について」

福島県立湯本高等学校 2年 英語科 丹 野 洋 仁

この研究の設定理由は、フィリピンの赤十字の活動がどういうものか、また日本の赤十字との相違点は何かを知りたいということと、フィリピンの国内での貧富の差を自分の目で確かめ、特に貧困地域への医療は行き届いているのかを知りたかったからだ。

第一に赤十字の活動内容については、以下のこととが分かった。フィリピンでは100もの赤十字支部があり、台風などの自然災害が起きたたびに、赤十字のERU (Emergency Response Unit) が救出などに向かう。さらに台風の影響などで、洪水が起きた場合の後のボランティアはレッドクロスユースという学生で構成されている団体が行う。災害があるとまず、貧困地域へ救助に向かう。フィリピンの赤十字活動として貧困地域へ3万から4万5千の家を建てたこともある。その他にも、自然災害の注意報の管理やお年寄りの介護、社会福祉にも赤十字が携わっているということも分かった。

その中でも私が一番興味をもった赤十字の活動は、献血活動だ。献血は日本と同じく赤十字が行っており、献血ができる年齢も一緒だ。しかし

大きく違うのは、採取量と採取した血液の保存の仕方だ。採取量は日本では、16歳から200ml、男性で17歳から400ml、女性は18歳で400mlの献血が可能なのに対し、フィリピンではどの年齢も450mlの採取が可能ということだ。一人一人から採取する量が多いということは、それだけ足りていないのだと思った。それは私たちが住む県にも言えることで、東日本大震災が起きた後、福島県などは他の県から血液を提供してもらわないといけない状態となった。血液が足りないということを身をもって体験しているのでフィリピンでは大変な思いをしているのだと思った。フィリピンでは450mlの血液を病院からのリクエストが来てからその分量に分けて配達する。血液はリクエストがくるまで、2度から6度で、35日間の保存が可能だということを聞き驚いた。日本での献血は全て赤十字が行っているが、フィリピンでは半分が赤十字、もう半分は政府が行っている。フィリピンの赤十字は、たくさんの大役を担っていることが分かった。

第二にフィリピンの現状については貧富の差が一番心に残った。首都や大きな地域では全く貧し

自由研究

いとは感じなかったが、1時間ほど車で移動するだけで道路が舗装されていなかったり、家の屋根が錆びていたりと、全く違う光景が目に焼きついた。パヤタス地方のゴミ投棄場のふもとを訪問したとき、特に貧しい地域があることを実感した。それは、家に水や電気が通っていなかったりするからだ。そして、貧しい地域の医療は行き届いて



いるかだが、私たちが訪問した地域の人々は病院の建物の存在は知っていても、それが病院だということは分からぬ人もいると言った。病院の存在を知らないということは、自分の体調などが崩れて苦しくてもどのようにしていいか分からず苦しい思いをするだけでなく、もしそのなかった病気が感染症だったり、投薬や手術をしなければいけない重い病気を患っていたとしても、生きられるはずなのに苦しみ、さらに生きられなくなることに繋がる場合もあるということだ。国内にこれだけの貧富の差があるということについて、非常に印象に残った。

今回の派遣でフィリピンのことをたくさん学んだ。それと同時に、私たちが考えなければいけないことが多くあると実感した。



「フィリピンの医療について」

福島県立相馬東高等学校 2年 菅野 有里子

私はフィリピンに対して、渡航する前はあまり良いイメージを持っていなかった。今回の研修でも、貧困層の人々が住む地域の様子に強い衝撃を受けた。しかし見学させていただいたフィリピン赤十字本社の施設は清潔で設備が整っており、日本と同じ医療を受けられるように見えた。フィリピン本部の方のお話では、国内の貧富の差が激しく、受けられる医療の水準も様々だということである。

以下の文章は、フィリピンの医療について概説したものである。

…2010年の統計では、フィリピンの人口は9,234万人で、マニラ首都圏の人口は約1,185万人。フィリピンと日本の人口形態を比較すると、出生率と

死亡率は共にフィリピンの方が高く、出生率は日本の3倍、死亡率は2.5倍で、特に乳児死亡率は日本の10倍以上。フィリピンでは首都圏よりも地方において出生率が高く、家族計画と避妊指導の遅れが指摘されている。避妊の方法別で見ると、女性避妊手術、経口避妊薬、荻野法など女性主体の避妊方法が優勢であるのに対して、日本では主流となっている男性避妊具の使用率は極めて低いのが現状である。また妊娠婦死亡率は日本と比較にならない程高い値を示している。フィリピンにおいては主要疾患の上位は下痢、肺炎、気管支炎、結核などの感染症で占められ、日本では比較的稀なマラリアやデング熱の患者も多く発生している。

(在フィリピン大使館 ホームページより)

自由研究

URL : http://www.ph.emb-japan.go.jp/visiting/consular_j/medical.htm

これを読んで印象的だったのは、家族計画や避妊についてである。フィリピンの男性は避妊に協力的ではないように感じた。医療機関が主体となって、男性による避妊の啓蒙活動をする必要があるのではないかと思った。

また、フィリピンは熱帯気候に属する国なので、様々な感染症が多く発生している。蚊の媒介するマラリアやデング熱の罹患者数も多く、中には命を落とす人もいる。

フィリピン人の主な死因についてであるが、日本人の主な死因はがんや心臓疾患であるのに対し、フィリピンの主要な死因は肺炎や結核だということである。こうした病気を未然に防ぐためには、国民の衛生観念の向上やインフラの整備、医療機関の適切な啓蒙活動などが必要不可欠である。医療機関のみならず、地域社会や政府が一体となって感染症予防に努めることで、こうした病気の発生を未然に防ぐことができるのでないかと思った。私は将来看護師になることを目標にしているが、医療について考える貴重な機会を持つことができて、本当に良かったと思う。



●事前・事後研修会の開催

○第1回事前研修

日 時：平成25年6月29日(土)

10時30分～15時30分

会 場：福島県血液センター

3階 会議室

内 容：

1. 日赤福島県支部あいさつ
2. 派遣メンバー自己紹介
3. 平成25年度派遣事業について
 - (1) 派遣事業の目的・概要
 - (2) 派遣日程案
 - (3) 交流内容について
4. 今後の日程、自己学習、準備について、質疑応答
5. 赤十字の活動について
6. 青少年赤十字について
7. その他



○第2回事前研修会

日 時：平成25年7月27日(土)

10時30分～15時30分

会 場：福島県血液センター

3階 会議室

内 容：

1. 派遣事業について
 - (1) 旅行日程、旅行手続き
 - (2) 交流内容、交流物品
2. 報告書の作成
3. 今後の予定



○事後研修

日 時：平成25年9月21日(土)

10時00分～15時30分

場 所：日赤 福島県支部3階会議室

内 容：

1. 報告書について
 - (1) 訪問日誌について
 - (2) 感想について
 - (3) 自由研究について
2. 各地区総会での報告について
3. その他

●報告会の開催

○県北地区高校JRC

日 時：10月22日（火）
場 所：日本赤十字社福島県支部
3階会議室

参加人数：50名
報 告 者：日下 輔 鈴木 悠太
仲川 優葵 菅野有里子

聴講者の感想：フィリピンのイメージが変わった。

日本も格差社会と言われているが
フィリピンの格差は日本より大きい
と思った。報告だがクイズなど
もあり良かった。交流時の衣装が
本格的できれいだった。原発の施
設は古い感じがした。



○いわき・相双地区高校JRC

日 時：11月11日（月）
場 所：いわき市生涯学習プラザ
参加人数：77名（湯本高校生徒1名、引率教師1
名、平養護学校の生徒5名、引率
教師3名を含む）

報 告 者：田中さくら 丹野 洋仁

聴講者の感想：フィリピンのお茶が甘いとは思わ
なかった。風土の違いからかなと
思った。赤十字の活動の違いはニ
ーズの違いからくると感じた。
キッチンカーを見てみたい。フィ
リピン台風の被害が心配だろうと
思った。原発は日本と型が違うと
言っていた。動かす気なら動くの
だろうか…



●報告会の開催

○県高校JRC

日 時：11月19日（火）・20日（水）

場 所：清陵山俱楽部

参加人数：119名

報 告 者：鈴木 悠太 仲川 優葵

橋本 裕太 安藤 摩耶

中村アイリン 田中さくら

菅野有里子

聴講者の感想：パヤタスの報告は今の日本では考

えられないと思った。生まれた国
が違うことで差がでて良いのか考
えた。自分もフィリピンに行きた
いと思った。お母さんが言った言
葉の「同情しないで自分達を見て
いてくれ」がフクシマと共通して
いるように感じた。原発の内部が
見学できるとは思わなかった。報
告している先輩たちが生き生きと
していた。フィリピン台風被害は
とても人ごととは思えなかったの
で何かできたらと思っていたので
募金できて良かった。



送った千羽鶴など



応援メッセージと共に



*報告とともにフィリピンレイテ島を襲った台風30号による被災者支援の呼びかけを行い、募金活動及び千羽鶴の作成などを行った。そのご支援の動きは派遣メンバー校だけでなく、各地区、各校に広がり H26年2月現在で募金報告のあった高校からの総額は574,043円にのぼった。

平成25年度 日本赤十字社福島県支部主催 青少年赤十字国際交流事業 “フィリピン派遣” 実施要項

1. 目的

青少年赤十字の実践目標のひとつである「国際理解・親善」の具体的事業として、県内の青少年赤十字メンバーを海外の赤十字加盟国へ派遣し、同国の青少年赤十字メンバーとの交流研修を通して、国際性豊かな青少年を育成し、本県青少年赤十字活動のより一層の推進を図るために実施する。

特に、福島県は東日本大震災による地震・津波災害に加えて世界にも類のない原子力発電所からの放射性物質の大量放出の被害をうけ、県民は未だにその後遺症にあえぎながら、復興を模索している状態にある。

今回は県内の青少年赤十字加盟校以外の被災地高校生も参加し、この事実を海外に伝えるとともに数多くの支援を受けたことへの感謝も伝えながら現地の青年との交流を図る。

2. 主催

日本赤十字社福島県支部、青少年赤十字福島県指導者協議会

3. 後援(予定)

福島県教育委員会、福島県高等学校長協会

4. 実施時期

平成25年8月11日(日)～18日(日)

7泊8日 成田空港 ⇄ マニラ
(滞在研修)

5. 派遣国、地域

フィリピン共和国 マニラ首都

圏、近隣州

なお、実施期間と派遣先の詳細については、日赤福島県支部とフィリピン赤十字社との間の十分な調整のもと決定し実施する。

6. 派遣人員

高等学校青少年赤十字メンバー並びに被災地高校生10人（各地区JRC、被災高校から1名程度）

高等学校青少年赤十字指導者（教師）並びに被災地高校教師
3人

日本赤十字社福島県支部または管下施設職員 2人
合計15名

7. 参加要件

(原則として下記の条件を満たしていること)

(1) 高校青少年赤十字メンバー

① 地区主催の青少年赤十字リーダーシップ・トレーニング・センターを修了し、ボランタリーサービス、先見等の基本的理解ができていること。

日頃の青少年赤十字活動に積極的に参加していること。
(学年は2年生が望ましい)。

② 心身ともに健康で、事前・事後研修、支部長（知事）表敬訪問ほか現地派遣期間中の集団生活による研修に支障なく参加できること。

③ リーダーとしての資質を備え、将来とも赤十字活動に関わっていこうとする意欲があること。

④ 語学力は必ずしも重視しないこととするが、適応性が求められる。

(2) 被災地高校生

① 心身ともに健康で、事前・事後研修、支部長（知事）表敬訪問ほか現地派遣期間中の集団生活による研修に支障なく参加できること。

② 研修の成果を学校や地域に還元していただくこと。

③ 語学力は必ずしも重視しないこととするが、適応性が求められる。

(3) 青少年赤十字指導者（教師）

① 青少年赤十字指導者として十分な指導歴を持ち、リーダーシップ・トレーニング・センター、県指導者講習会等の参加経験があり、青少年赤十字ほか赤十字の基本的理解ができていること。

② 心身ともに健康で、事前・事後研修、支部長（知事）表敬訪問ほか現地派遣期間中の集団生活による研修に支障なく参加できること。

③ 将来とも赤十字活動に関わっていこうとする意欲があること。

(4) 被災高校教師

① 心身ともに健康で、事前・事後研修、支部長（知事）表敬訪問ほか現地派遣期間の集団生活による研修に支障なく

- 参加できること。
- ② 研修の成果を学校や地域に還元していただくこと。
- (5) 記録写真、ビデオの利用 事前事後研修、現地派遣中の派遣メンバーの活動状況を写真やビデオに撮影したものについて、赤十字の事業紹介等広報活動で使用することに承諾いただけすること。

8. 応募書類、応募期日

高校生及び指導者（教師）の派遣を希望する青少年赤十字加盟高校並びに被災地の高校生徒及び教師は、応募書類（別紙1、別紙2）を平成25年5月31日（金）までに日赤福島県支部へ到着するように送付するものとする。

なお、応募受け付けは、一つの高校につき高校生1名とするので、学校内でよく調整願いたいこと。

9. 派遣メンバーの選考

(1) 選考

日赤福島県支部は、提出書類等を審査し、特に青少年赤十字加盟高校については過去の派遣実績、地域バランス等を考慮し派遣メンバーを決定する。

日赤福島県支部は、結果を速やかに応募のあった高校へ通知する。

(2) 参加承諾書

派遣メンバーとして決定された者は、すみやかに参加承諾書（別紙3、別紙4）を日赤福島県支部へ提出する。

(3) 派遣の取り消し

派遣メンバーとして決定された者について、後日不適当と認められた場合には、派遣を取り消すことがある。

10. 研修内容

- (1) フィリピン赤十字社訪問・関連施設見学
- (2) 青少年赤十字加盟学校訪問・青少年メンバー、地域住民との交流
- (3) 伝統文化・史跡視察・フィリピンの災害対応研修
- (4) その他 フィリピン家庭訪問、青年ボランティアとの交流、未使用文具等の寄贈、関係団体訪問を予定

11. 経費

- (1) 参加者本人負担
　　パスポート取得経費、海外旅行保険代、予防接種代（1万円を超えた場合に超えた分）
- (2) 日本赤十字社福島県支部負担
　　国内交通費、渡航費、宿泊、食事、予防接種代（上限1万円）ほか(1)以外の経費

12. 事前・事後研修

派遣に先立ち、派遣国の状況、交流内容等についての事前研修会を実施する。

帰国後は、報告書作成、各地区での報告会実施等のための事後研修会を実施する。

日程の詳細は、派遣決定者に追って通知する。

事前・事後研修会の参加に要する旅費は日赤福島県支部が負担する。

(1) 第1回事前研修会

- ① 期日 平成25年6月下旬
② 場所 日本赤十字社福島県支部

(3) 内容

派遣事業の概要、赤十字と青少年赤十字について、代表・

団員としての心構えについて、フィリピン青少年赤十字との交流内容について、その他

(2) 第2回事前研修会

- ① 期日 平成25年7月下旬
② 場所 日本赤十字社福島県支部

(3) 内容

派遣日程について、事前研修のまとめ、研修旅行に関する諸注意、その他

(3) 事後研修会

- ① 期日 平成25年9月下旬
② 場所 日本赤十字社福島県支部

(3) 内容

派遣概要の報告、報告書の作成について、資料整理、その他

(4) 支部長（知事）表敬訪問

出発前または帰国後、福島県庁との調整により必要により実施する。

13. その他

帰国後は、研修の成果を自校ほかそれぞれの地域等で広く公開いたします。

なお、現地の治安事情等止むを得ない事由により派遣を延期または中止することがあります。

持参の交流物品

1. 訪問先への土産

- キビタン
- 福島写真集



2. 一円玉募金（目録）、フィリピン本社へ 金380,000円

3. 支部からの持参品

- JRCピンバッジ
- JRCワッペン



4. 制作したトピックアルバム

あとがき

東日本大震災があり4回続けられていたフィリピン派遣が中断されていました。以前のフィリピン派遣メンバーの活動成果を知っている後輩や学校関係者からは再開を望む声が上がっていました。東日本大震災から3年余りが経ち今年度ようやく復興支援事業の1つとして再開することができました。加盟校のみならず県内全高校より参加人数を上回る応募があり関心の大きさを感じました。

フィリピン赤十字本社をはじめマニラ近隣州を訪れ交流とふくしまの現状の報告と震災支援のお礼を行いました。参加メンバー10名中の未加盟校の3名も事前研修等でお互いの理解も深まり連帯感が生まれてきました。フィリピンでは多くのメンバーが学校に行っていない子ども達やパヤタスでの家庭訪問で格差を強く感じました。その解消のためのパヤタスのNPO法人は日本人がはじめ、運営していました。スタッフの姿に心強さと感謝の念を抱き、自分たちは何ができるかと考えずには居られませんでした。

11月にフィリピンレイテ島付近を襲った最大級の台風被害を目の当たりにしたメンバーは自分達が行った国の被災に何とか支援をしたいと県大会や各学校・地区で募金活動を開始しました。リーダーとして動き、力を発揮しました。青少年赤十字の実践目標の「国際理解・親善」の実践を今後も考えて行くことになると思います。

この機会を与えて下さいました学校関係者、保護者の方々、フィリピン赤十字本社、・支部と青年ボランティアの方々をはじめ皆様に感謝申し上げます。

日本赤十字社福島県支部青少年赤十字担当 金子 久仁子

